

怪談 保嬰の告白

354

横燕枝口演
平次郎速記



翠
出

序

烟波香茫たる。瀟湘の秋景ふん。流石の巨勢金剛も。快筆投げ。婀娜嫋たる貴妃の春姿よは。争で土佐法眼も。丹青を彩するを得んやとば。今て昔の素人精神。文明日進の餘澤は。實に新玉の年かさね。瀆の眞砂のかずくに。發明工夫の智慧競べ。世の情態も其儘と寫して。殘と寫眞鏡。貴妃の春姿も瀟湘の秋景も物かはと。巨勢氏に投餼の勞を謝し。土佐氏に彩飾の苦を略くさるべし。とは左りながら飛鳥川。昨の淵に今の湍で。變りゆく世の人情。其情態を生寫す。東都に芳名とて。春風の。靡く團柳の亭主人。流石情話の

巨擘として。羽子衝く妙齡き乙女より。犬打つ街巷の童子まで。誰れ
白波の打寄とる。駿河國に去歳の夏時。避疫がてらの漫遊も。何が
な珍話と探偵に。探し當りて生讀の甲斐ある土産と齎らせしん。
此狐ヶ崎の怪塚奇話。其意匠の巧拙ハ。淺學短才吾儕に不確定け
れど。懸河の辨ある柳亭ハ。聖世の光の歳の端よ。初音を謠ふ鶯の
聲も長閑に咲香ふ白梅亭に演ぜしを。吾儕言語の寫眞法めて。寫
すハ巨家よ因みあるすなハち件の草紙あり。とばれ筆者の鉛
鋒も假令丹青で外貌を彩色もその土佐巨勢に。及しざるを遠け
れど。其人情の眞面目。正味正眞に撮寫せんこと。いかに一步を讓

らめやで。自稱兎評も嗚呼おまこげれど。今此草紙の精神も。全く
勸懲の主趣されは。いかに教育に裨補なからずやは。希くは愛讀
諸君。筆者が微意とて了知給へど。拙き文も願みぞ。聊か序端にかく
の如し。

明治二十年の陸月といふ月。まだ門松に注連結ぶ日。東都の
客舎に旅寢の徒然。床に活せし室咲きの梅が香薫る。南窓の
ゆで水

竹園散士とてい

博仕何屋の若松

妻婿殿様のお侍

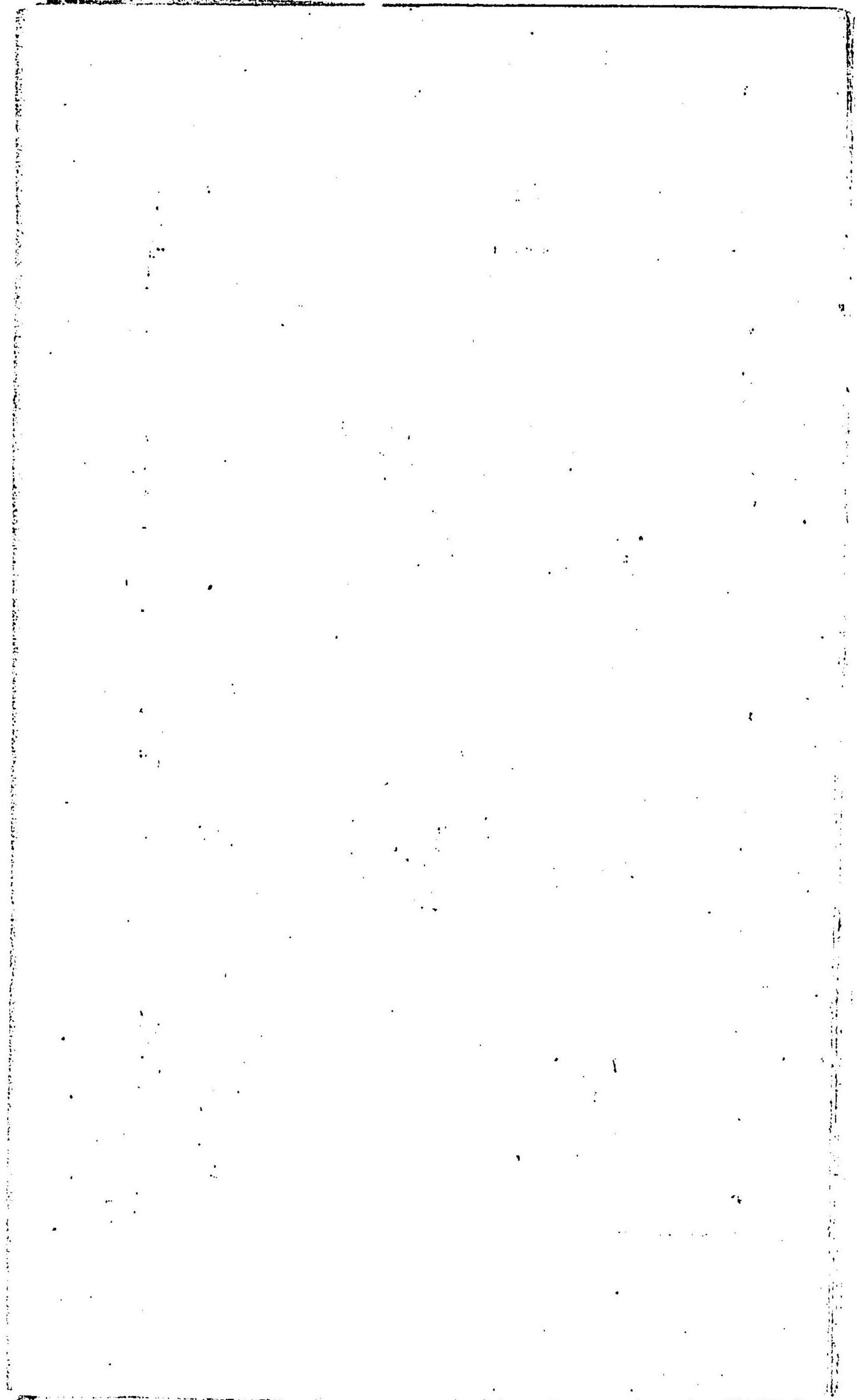


俳優尾上菊亭

野村胡堂の筆



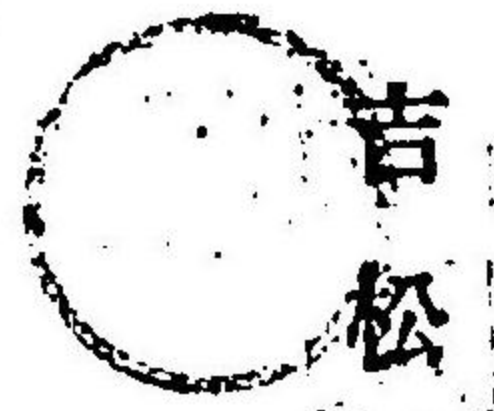
墨新好筆



欠

MISSING

怪談伊豆の吉松



談洲樓燕枝口演

竹園丸山平次郎筆記

第二回

「山鳥の魯の鏡のおろのにも溺るゝまでに水がぐみして」といふ古歌が御座い升が山鳥といふ鳥は自分羽色の美麗なのと自慢して水鏡と爲し終に一命と没落ますと云ふことで御座い升が今晚入らせられた御婦人方には決して其様な方は御座いませんが自分の嬌媚なのに餘り愛着過ぎたこと随分其身と過まり終に一命とも没滅す様なことがありますので私昨年の夏悪疫豫防の爲め駿州静岡に旅寢と致して居り升た時間に入れました情話と今晚より高聴に入れます隠居「誰だ誰が来たナニ本通の嫁が来たのフ、ン喚びに遣たのら来たのだ 下男「へい此品とお土産に持て参りました 隠居「ナニ土産隠居所へ来るに土産などには及ばぬ併し敷居越しては話が出来ぬのら直ぐに此處へ通れといへ用のあるから喚びに遣つた取次の貴様が氣がさのぬは 下婢「サア、此處らへお通り遊ばせ お山「御隠居様御氣嫌よろしく早速参上る筈でありましたが店が

取返すして隠居「ア、お出なさいね山のイヤ何はさて今朝未明くらら氣になつてならぬ店は多
 忙のけつるふだ山「相變らず多忙しくそれが及ぼしまして奥までが多忙しう御座い升且那にも
 參堂つたら宜しく申上て呉れと申され升た隠居「うれに附けては今日は獨身で來たのナ、下女
 と二人の孫娘のお静は如何したへ毎日お静の容顔と見るのが快樂だにナせ携れて來なつた山
 「ハイ行きたいと後姿と逐ひました何が急に御用があり升とのことで隠居「ア、茲地は庭園
 も廣いから連れて來て遊ばせたら宜うつたのにろして彼の娘の和女に似て、縁は美し行末誠
 願母しく思つて居る自分の宅へ來るのに心配は無い打ちくつるぎて從容としたが宜い少し和女
 に話したいことがあつてコレ久助何ぞ其處に据つて聽いて居ないでも供て來た女が居るだらう
 犬も朋輩鷹も朋輩同家の者じやアないの愛相の無い茶でも煎れてやれ用がありやア手叩くの
 ら彼地へ往つて居る其處と閉めて左様だ〇お山ことしく喚びに遣つたは何の用と思ふの
 知らんが少し和女に話と爲なければならぬが番頭の竹藏は何時にも能く勤めるの山「ハイ陸日向
 むく勤めて呉れます隠居「ア、左様の自己も此の隠居處に斯ふして樂る体に成つて何不自由な
 く消光すのも全く府中の本通で一と云つて二と下らぬと云ふ塗物商賣で遠州屋清太郎と云へば

誰知らぬものも無い身代の餘澤で斯様に繁昌すると云ふのは辛抱に在ること第一に悻と
 との夫婦間和合く番頭の勤め方が適いのだら繁昌するに違ひないとサア改めて此様な話と爲
 るとお浚ひとする様なものだがの和女の親御と云ふ者は此の駿州阿部の山家の百姓で私の懇親
 くなり始めと云ふは和女の親御が薪と負けて賣り來る朝夕顔と見る度に臺所に行つて飯と喫
 食て行くが宜いと或日には宿めて遣ることもあつたが其内に段々懇親になると旦那様折入つて
 一つお願ひが御座い升と云ふのら何だと聞いて見ると私に娘が御座い升何卒世間と覽せたいと
 存じ升が此方様で奉公と致させと存じませす使つて見て下さりませぬのと頼まれたが嘉永二年
 の春二月恰度和女が十四の年ご私の家へ連れて來て謁見したとき實に山家育ちに不似い
 といひ折屈みと云ひ批議點が無いのら老婆とも談合して家引取り小間使に使つて居る内世間
 では清太郎の妹の様に噂として居つたがさて和女が生情がつき恰と十七の時懐妊になつた容狀
 で在つたのら若しや見世の者と肉交でも爲は仕ないのと心配で在つたに能く和女に聽いて見る
 と旦那様の種類と宿したと云ふ又清太郎もお山と女房に貰つて下さいと云ふのらうれなら親
 父や生母に話として假親と立て改めて遠州屋清太郎の花嫁と爲し當る十月に産誕したのが彼の

玉の様な今のお静夫婦交情の好いので歎こんで居るうち喜びあれば哀みある世の習ひ家母は黄泉の客となり夫のら仙問裏に斯ふして隠居して居るといつい此間の事であつたが深更に門口と敵いて本通の本家のら参りましたが何卒御隠居様に若旦那様が九死一生と云ふ報知に本家へ往つて奥へ通つて見ると云ふと和女と始め大勢の者が取圍て落涙に暮れて居るとされ醫者も来て居るのら何卒全療なり升様に願つて見たらこれは危篤事にもあるまい何卒の致しませうと仰しやゝのらヨリくお願ひ申すと云ふので結構なれ薬と戴き看病として居るうち看病疲れに寝るともなしに一熟睡深夜に不意と目と醒て見ると四方に誰も人は居ず外人はともわれお山は如何したと四方と窺ひ見るに次の座敷に斯の座敷誰だ此廣い家に他へいつて寐たら可のらうにと起あがつて襖とつと開けて見ると和女と番頭の竹藏と枕と並べて寝て居る故喚ひ起そうと思つたがア、宅のら火事と出す様なものだと思つたらじつと耐忍へて灰吹と二ツ三ツ敲くと云ふと暫時して斯の聲は止む又二ツ三ツ敲くと云ふと自分の敲いた音で目が醒めて見ると私此隠居で見た夢これの夢あら宜いが若し實に竹藏と此様不義でも爲て居たら衆人さまには笑はれ遠州屋の(泣涕形状)暖簾に環遊が附く所(ス、リ泣)これが夢だのら可いの過つて改むるに憚るるこ

と勿れで情願心得違ひなら改めて(泣)改めて呉れ是は心得の爲めに隠居が言つて置くのだお山返辭が無いが泣て居るな挨拶もせず泣て居るのら身は覺ゆるでも有つての事の山「イ〜御隠居機身に覺ゆるが有つて泣いたのでは御座ぬません老体が妾とられ程迄に可愛がつて下さりませればこそ夢に比擬つての御意見が餘り有難くつて泣ましたので實は妾が竹藏に目と掛けまじのと老体に何者の譏詐ぞと云したに相違御座いません妾は今日まで大家の女房になつたと高慢は致しません山家の百姓の娘が是程の大家で嫁入して出精致したのは難有と片時も忘却は致しません以後はもとより改心する餘まり主人の權がなく奉公人と朋輩の様に致したのが誤り情願ぞお心と押へられませぬ様にと涙と流して其場と言繼めましたが竹藏との密通が如何して知れたらうと深く驚きながらツ〜に暇乞として彼の隠居所と出まして本町の本宅へ歸つて來ました山「今歸つて來ました番頭竹藏「エお歸りなさい山「竹藏旦那様は何處のれ出でなすつたの竹藏「ヘイ過刻字津谷迄用事が出來て入らつしやい升たがヒヨツとすると今夜は歸宅が無いの知れませぬメテ御隠居様の御用と云ふは如何云ふ御用で御座い升山「竹藏少し汝に頼み度ことがある鳥渡與まで來てれ呉れ竹藏「マア奥様先へ入らつしやい跡のら参り升のら〇竹藏「御

深窓さん貴嬢のお顔色の悪ると思ひ心裡にあれば色表面に現はれると何ぞ御隠居様に言はれた
 とが山「竹藏耳と貸しておくれと何やら耳語す竹藏「へエハ、アくすむつたいへエフン、フ
 ンフン其れじやア御隠居様が何して御存知だの山「御隠居様に知れた上は仕方が無いよ竹藏」ど
 うせ是れが御隠居様や旦那様のね耳みでも這入た曉に梵天國になりますことは知れたこと貴
 嬢様は四歳に成りますお静様があまりなさい开れば私どの事は此れ限に冗空ぬ夢と見たと明ら
 めて被下まし山「竹藏何と無理ことと云ふのだへ平生何とれ言ひだ此 事々若し知れた時には公
 方様の御膝下で妾と夫婦に成つて消光さうとお前は言つたては無いらへ竹藏「夫程迄に私ど江
 戸へ行つて夫婦と成つても消光なさる丁箇なら儘ヨ毒と食は、皿までとやら今朝程爲替の金百
 五十兩請取まして店の用算筒に納れてある故彼の金と路金にして山「百や二百の金が何して足
 りるものかね金の工風は私が仕やうのら日が暮れたら店と奥とと別々に錠と返けだし道で落合
 こととして私の様な者でも見捨てに情願今夜の内に逃げてくれ呉れ落合ふ先は横田の近江やにて
 竹藏「日が暮れたら無論支度として出ますのらと密々 話としてお山の五百兩と云ふ大金と盗み
 出し百五十兩と合併まして日の暮れるのと待ち初夜聞と幸ひ横田の近江やと云ふ立場茶屋へ參

りました扱兩人は此處にて出遇ひ竹藏は五百兩と懐中爲し百五十兩の金と用意の爲りにお山に
 渡し竹藏とは備ひ道と急がして江尻に泊りまして其翌日は態と道中と休みく參まして沼津の
 ら箱根と越ぬますと足が付いてはならぬと云ふ所を修禪寺の熱海邊で逗留しようとしてそれより
 れ山と竹藏に乗せまして九折なる葎山越と越し伊豆の修禪寺へ泊る積りでこそく上つて行き
 舛ど一人の大男の色の黒い身の高い眼のぎよろくとした怪い奴が長い葉刀と佩帯んで前途に
 街立ち賊「待てコレ待て往來の旅人と待つて居る盗賊さまた愚圖々々すると生命が無ぞサア路
 金は無論より纏身衣脱いで行きやアがれ後部に部從て居る奴輩は何奴だと大音聲に怒鳴られた
 ろら竹藏人足は驚愕して逸足出して逃げて仕舞ふ竹藏「人足の衆オーイ逃げちやア、ハ、ハ、ハ、
 ン、ハ、ハ、ハ、と泣聲と出し竹藏「お盗賊さす私〜、私し共は金など所持さず者では御座いま
 せんカ、ハ、ハ、ハ、逃走者で御座い舛情願お救命なつて此着物とれ剣なすつたつて是れ一衣しか
 御座いません情願お慈哀にれ救助なつて下さいましお救助なつて下さいましコレ御盗賊さ
 まコレ、コレ斯様に手と合せて拜みまぞ賊「馬鹿なことと放言やアがれ手前の竹藏のら後れて
 來る容子懐中の腰のさうな鹽梅其處は商賣だ一脱視たら道がすものごと手とスート懐中へ差入



れる竹賊「ア、もし首領アレーソリヤ狼藉でア、何と抵抗やアがるだ 竹賊「ア、コレ此金と奪れましては何共ア、ア、ア、アと瓦多く霞へなら最前より此の景状と傍観て居りましたか山は一生懸命彼の盗賊の後部から足に纏ひつくと賊「此女何と邪魔するんだと口たど賊たのが脇腹に刺つてターンと反轉る竹「アレーソリア私の女房とどのけよると賊「何と吐露やアがると衝飛す機會と撃つて后る向に石に瓜突通りの谷底へ墮落て終まん賊「ア、コレア遺憾大丈夫金と持つて居たのにナ此谷へ墮落りやア生命やア無へが併し金は死ぬさうけへなした何にする明日夜が明ければ谷へ廻つて探すと仕やうそれは左うと此女だつて幾等の金で所持て居やアがるだらうと抱き起して顔と監視めア、婀娜的ケナ此的ア今迄恣に目が眩感で見ぬ多うつたが輝妍的女だなアと懐中と探索り見まするとメツマリ手頭に觸る胴巻賊「此の通りだ蛇が魅る呑んだ様に所持て居アがる此的ア僥倖た何しろ日金の吾隠巢へ携拐て行つてと獨合點つゝ女に活を入れ賊「緊固しろ山「ターンと漸く息と吹返す賊「コレ健固仕ねーヨと介抱と致してこれより日金の山懐なる自分が隠巢へ行行き遂に強姦されましたが山はこの山賊日金の番五郎と云ふ者と夫婦になり因果の種と身に妊して男子と産落し吉松と稱號しましたが此の

第二一回

吉松と府中に残して來升たれ静と後來知らず夫婦になると云ふ長物歸りの明晩演し上ます

古い道歌に「我れ横に歩行みながらに吾子には直ぐにわめと無理な親壁」と詠んで御座い舛が自分が悪爲と致して居つて其子とば善良者に生育たせやうと致しても容易そうは悉るものでは有ません前同演し上げました駿州府中の塗物問屋遠州屋清太郎と云ふものゝ花嫁に下婢のら出世致して成りました山は自分の容色に慢じ特に多淫の性でありますのら大切なる貞操の道と破りまして夫と捨て、番頭の竹藏と密通と致し其末山は本夫の金五百兩といふものと竊取り番頭の盜奪ました百五十兩と一つに併せ都合六百五十兩と云ふ大金と所持し舊來の恩家と後に互に手に手と兩人が風とくらつて逃走致しましたが箱根と越えてのら遁手が付いていならぬと云ふので伊豆の非山越にのります時盜賊日金の勘五郎に出遇ましたが主人の冥罰を眼面に被ひ來て竹藏は千尋の谷底へ蹴墮され山は弱腹と蹴られて氣絶と致しましたのと勘五郎は介抱致して自分の恩家へ携れて参り遂に強姦と致しましたがそれより夫婦の様に相成り情の種と身に宿して吉松と云ふ小兒と生み早くも十年の星霜と経過ました山「吉坊や、く茲地へか出で吉坊

悪遊戯と爲ないで茲地へ出てヨ汝は今年最早十才では無いの阿母さんの膝下へ来て阿父さんは最早歸宅するものじやないのを妾に聞かなければならぬに少しも阿父の安否の願ひないで平常悪戯ばかり爲て村内の小供に訴報告悪とされ時々他村まで出掛ては喧嘩と仕のけ又他人様の物と奪取て來たりして正實に最う仕方が無いじやアないのチ(泣)母心子知らずと云つて(泣)マア茲處へお出で吉「何んだへ彼に用へ山「アイ用があるから此處へお出で親に似ない子は鬼兒だと云ふが汝は餘程悪い處は阿父さんに似たね(泣)それでも悪戯の内にも日金の觀音寺の和尚様の修庇蔭で手習ばかりの愛えて阿父さんや妾は及の無いか其れに附けても阿父さんの身の上必竟其内には歸宅で有らうけれども何時迄も斯様ことと爲て居ては困る妾も不慮此家へ来て據無く盜賊の女房に成り暮して居るが思ひ廻せば廻すほど未來のことが恐怖しく何様のして勘五郎さんと勤めて善人に爲て遣りたいと思ひ意見とそれとも少しも改心す(泣)殊もは辭岡に残して來たれ静のことと思ひ出し今頃は如何して居ることの定めて繼母の手に折檻られて居るだらうと思ふにつけてもヨ一悲しくつて(泣)哀しくつて斯ふ成り行くも皆な妾の心得違ひら如此結果に爲つたので今更悔んで甲斐無いの唯此上は何卒汝と眞人間にして資本の金と調達

て堅氣の商賣とさせたいと思ひ阿父さんに相談すると三年前に勘五郎さんが承知して呉れ近所では金の工夫も出來ぬらと信州の越後路とさして出羽奥州の方と廻國り責めて金の五百兩も調達へて來るのら吉松の事と頼むと出て行つた限り未だに何の音信も無いが多分政廳のお役人の捕縛にでも遇つて御死刑にでも成たのら又何處のへ賊お這入つた先で擱つて殺されやアせぬかと寝ても其様な夢ばかり見て居て遂に睡とも仕ないに汝は阿父さんの身上は氣になら無いのユ吉「自己ア阿父は何故歸つて來ねへの吾アだつて知つて居るは他人さまの金や品物と無代で奪る家業として居るだア三四年も費るのら吉松にも土産と持つて來るだらうと思つたに政廳のお役人様に捕縛つてね所刑とらで打殺されたら又盜賊お這入て誰か打殺したつて吾ア探索して親の敵討ち度ナア山「イヤ殺されたと云ふでは無ければ餘り歸宅が遅いのら万一其様な事があり仕ないのと心配したのだが阿母さんと二人で斯ふして居て若し阿父さんが御所刑にでもあつたなら汝は如何すると思ふのだ吉「吾ア御役人でも何んでも阿父さんと殺した奴ア探出し己一其奴の首でも引て抜て遣る阿父さんの敵討たねーじや措ねー己如何しても殺した敵討つ(泣)己一敵ぶつたヨ山「それが汝は悪い事だ正直なる渡世を爲て居たでは無し他人さまの物と

盗むと家業としていれば何時の其身も罪せられるは當然だうら諦めなければならぬ汝は心と入れ換へて何卒良い商賣と覺ゆ眞人間に成つて世と送つてお呉れ万一亦政廳のお役人の手にあつたら汝は亡父の死後と懇切に弔ふが何より孝行吉「吾ア否だ殺した奴め急度撃つぞ己一子供だつても力ア剛強のら負けねーだ山「死んだと云ふに極つたので無いから心得の爲めだうら言ふて置くのだと母子の内話の其内に旅人「ハイ御免下さいまし吉「ハイ何方旅人「ハイ一寸お願ひ申したいことが御座い舛道に迷いました旅の者で御座い舛が木部屋の隅のお盥所でも苦しう御座いませんら夜さへ明せば宜しう御座い舛情願泊めなすつて下さいまし吉「阿母ア道に迷つた旅の人だと云ふが如何しへい山「それは嘸に困難だら一誰人でも宜しいから直ぐに柴折と開けて此處へた遣入なさいませ此な矮陋い茅屋でも宜しう御座いますから旅人「此れは難有うぞんじ舛もうく道に迷ひまして實に困ります山「サア此地へ吉坊の荷物と此地へお取りうして盥と持つて行つてね箱の水と没んで上げてお足と洗つてた上げ「如何致しまして洗足の水まで没んで頂戴致しましては恐れ入り升阿兄さん何卒其荷物は壁側に寄せて置いて下さいましア、どうも非常が腕力私さへ持重りの仕ますのと輕氣に引下げてイヤハヤ小兒には似ぬ大力賣

に驚き入りました吉「サア叔父さん此地旅人「難有うぞんじ升親御が深切なら息子さん迄が深切にして下さる難有う御座り升と草鞋とくく上にあがる山「何卒此地へ吉坊や日が暮れた様だのら行燈を點ける支度と爲誠は何もね愛想が有りませんでマアお寒う御座いましたら此處は山蔭で御座いますのら別して寒くついでいけません何卒御遠慮なく此地へた寄りなすつてね煖りなさいませと燂べる松葉の煙にたえ兼ね煙に燃せて山「コンコンコンサア此地へコン旅人「此れはどうも御深切にコレ此通り先刻の時雨に濡れまして潤漑にありました實に私は箱根の温泉に湯治と致して居りますたう今度は熱海にと思ひ立ち十國峠の山の上で尋ねましたら何んでも日金の觀音の方へ出ますと熱海に抜けると云ふ事と聞きまして來るともあしに踏み迷ひまして横道へ這入り何方と見ても途は無し有るものは所々に毛が生へた塊ばかり彼が狼の糞だと申す事日は暮れらるる夜分になりました狼に喰れでもしたら如何仕やうと一時は身の毛も逆立ちしましたが誠は御庇蔭さまで助かりました山「誠に此邊は狼が深山出て參つていけません燂火と視ますれば恐怖がつて寄附きませんから貴郎從容として御休みなさいまし何んにもありませんが味噌漬がありませう御膳とれ進げ申しませう旅人「イヤ私は箱

根の羽布屋で支度と充分爲しまして握飯とも貰つて参り最前十國峠で食べて参りましたら最
 う腹は満腹居りますのら園畑裏の傍に燵て置のして貰ひますれば宜しう御座い升山「貴郎は箱
 根にも湯治として被入しやいましたの 旅人「ハイ、此以來居りまいたか同處は倦厭まとも
 のではから伊豆の熱海から修禪寺の方へ行きたいと思ひますが今年には熱海に歳と越し來年の三
 月頃東海道と通行まして有馬へ行心算で御座い升山「左様で御座い升の然う湯治と成さつてお
 遍歴ではた快樂で御座いませうお同伴も御座いまして 旅人「イヤ一人旅行で参りました併し此
 家は和女さまと息子どんと二人限りで御座い升の山「ハイ亭主が御座いましても年の内に一度
 の二度歸宅りますす斗りで旅のら旅に消光す旅商人で御座い升が三年前に家出して未だに戻つ
 て参りません 旅人「ナニ三年前にお他出あさつた限り左様で御座い升の私も三年前から旅
 遊歴補振り遇ふも他生の縁私の方ともし旦那様が御通行で御座い升たら何卒に立寄と願ひませ
 私の上野 國縁 野郡金井村の藤八と申しまして中仙道のら直近傍で御座い升自分も矢張年中
 旅から旅と遍歴て居りますすが斯ふ申すと自慢の様ですが拙宅は土地では可也不可也生活と立
 て、因りの致しません田舎酒の一盃位は此の朝禮には進呈ますのら息子どん何卒成人くなつた

ら阿父さんと一所に私の宅へ立寄つて呉れ上野國縁野郡金井村の藤八と稱ふものだから山「
 コレハ、御深切に申して下さります 藤八「貴婦さん私の荷物と持運んだ息子どんの大力のら
 少しお話し申したいことが傍座りい升すが息子さんもお聞き下さい隠くしますことと人さんに
 陽はに話せば戯侮に罪の減ふるとやら申しますとが私は若い内から此息子さんの機に力が強くて
 小角力の一番も角つて如何な剛強い奴が來ても負けチー丁箇で居りましたが自慢した其腕力が
 順と落ちて仕舞ました原因はと云へば三年前……フン 恰度其夜も今月今夜しのも九月の十三
 日月見の宴に私は親類に招れ酒の馳走になつて歸らふと暇乞とすると物騒だのら夜が明けて歸
 へつたらと言はれましたお何に途中で怪物でも出るあら出ると宅と差して田圃の畔道をたく
 やつて家の門まで來ると誰だの知れぬが我家より馬と茲地へ引張つて來る奴がある月の明光で
 誰人だらうと近接くまゝに面を覗くと覆面として居る奴が居て馬の背上に何やら荷物と負け
 てゐるのは黄贖へ自扱の定紋附の風呂敷で二包と負けて有るのらコリヤア的然盗人に違へネー
 と遽然盗賊の弱腰と角力の手で以て倒と畔に抛擲まると痛處が悪くつて氣絶としましたそれを
 ば遽然私が引揚つ、馬の手綱と持つて宅に歸り家内の者と喚起して聞いて見るに誰も盗人の這

入たのと知らなかつたと云ふ騒ぎうれから其奴の被つて居る手拭と取つて視ると面貌と看るばありでも戦慄とする位右手から此の小髻右の頬へ掛けて刀の古創ヤイ汝ア一体何處の奴だと聞て見れば私は所在定めぬ風來者だ今夜に前様に櫻つた上は品物は悉らんら情願生命だけは助けて呉れと云ふら馬鹿と首へ何國の生れで名は何んと稱ふと殿しく尋ねますと私の名は勘五郎と云ふものだ吐露ました山「エ、(嘆息)其内に夜に皓々と明けたら村内へ知らせ遣るとサア盜賊が擱つたと云ふので我先さむと集まるるれら村内の群衆が口々に何にも品物を掠奪ねーのら放免して遣れと言はれましたが此奴助けて措ては又如何な兇惡ことと爲やアがるの譯のらチーと譯の説諭も聽かず酷く折檻と爲ると聲處が悪かつた卒々其盜賊と打殺しましたと最前よりの藤八が問す語りの容子とば逐一聞いた夫の變死山「それでは其盜賊と打殺してお仕舞の藤八「ハイ、それら政廳へ願つて出ると一通りの御叱責で私は済ましたけれど村内の衆徒は縛ると觸ると口々に嗚呼滅相も無い藤八と云ふ奴は苛酷奴だ盜人よりも殘酷野郎だ盜物と還りから生命と助けて呉れると云ふなら助けて遣れば能いのに人の怨恨のうらみで如何爲るものぞ打殺された盜賊に取附られるだらう何んと苛酷奴だとそれら月待日待が

つても私其場へ行くとい入立ち二人立ちして皆逃げて私の側に居ては無く彼の藤八とは接合ふなど皆衆人さまに蔑視られ尙亦其れば有りて多く何だの其月日が來ると私の身体が自然と勘五郎と云ふ殺した男引張れるやうな心持がして顯然と目の前に姿が視ゆるれと苦に思ふて病ひつゝ村の醫者ぞのに診察て貰ふとこれは神經と云ふ病氣だ此の病疾は名所奮動でも遊覽て歩行いて氣晴らしと爲るが一番宜いから湯治でもして氣と散らせと言はれましたがそれら伊香保島脚津と所々方々と斯ふして歩行いてあります此れと云ふ原因は腕力自慢から起つたと……息子とん何處へ行つた、田舎者の辻妻の合ハチ一話で面白くねーとみねて外へ行つて仕舞つたナコレ貴婦さま泣いて御座るの嗚呼私も悪いこと仕た道に迷つて困る旅人にさへ此様に深切のある貴婦さまの了簡では泣うつしやるのも道理のことサア、長つたらしい懺悔話に面目ない山「情ないことと和郎は被爲ました其勘イヤ盜賊が品物は返すら助けて呉れと云ふことなら助けてお遣りなすつたら宜しいに(泣)見す知らずの妾共ですら餘所の時雨と思ひますが其の母子の者イニ縁族の者でも聴きましたら和郎に猶更怨恨が掛り(泣)ながら齒切しりと(喉)喰ひついてゐる遣りたし様で浮座い舛(泣)藤八「ハイ貴婦様に然う言われリヤアどうも面目次

遺書と見て吉松は大に驚愕致し遠くは行くまいのら後追願てと支度して山と越え谷と渡りて諸々方々と尋ねましたたが終に跡と見失ひままた必竟是れより母子の如何なりませすの其情話は何れ次回演上す

第參回

「引續きまして一席申上すは靜岡土産伊豆の吉松の情話で誰やらの古い歌に「人の親の心は闇にあらねども子と思ふのへに迷ひぬるのな」と詠で御座いますが何國へ参りましても親子の情愛に變りの無いものだと申し升の相違御座いませぬ事ですがどうも親が子と思惟い升程子が親と思ひますれば間違と言ふものは御座いませぬが如何も子の方では親程に思はんもので清「捨てたいては不可ぬのら當人と此地へ呼んで呉れ彼娘に意見と言はにやアならぬ何程同種異腹て居る親だのらつて和女は親に違ひは無いに宜し氣に成つて親と親とも思はず此地へ呼でれ呉れれ妻「サア左様では御座いませうが彼娘と此處へ呼んで又意見と成さると血で血と洗ふ様な事に成りますのら情願れ止成さつて新參の奉公人迄に餘計な事を知られますのら何卒私に任せ成すつて清「いゝや成りませぬ此處へ呼んで呉れ和女は彼娘の影日向に成つて可愛がり呉

く養育て呉れるのと其恩義は少しも思はず他處へ行つては私の母の繼母で御坐い升のら邪見で困苦すすと云ひ散して居るどの事何程親子の中でも私は和女に氣毒で成りませぬ妻「いゝ、彼のお静は私 が腹こる苦めませぬが實子同様に思ふて居り升後來は死水とどつて貫はにやア成らぬ親子の中何も氣毒なとは御座いませぬ妻は可愛くて成りませぬ清「和女は餘り可愛りの過度のら彼の増長して成りませぬ左様庇蔽せず此處へ呼んで呉れ妻「ハイ只今呼びは致しませぬ最う童女では御座いませぬ十七にも成つて居りますのら童女と敵手の様に仰在ても聞させぬのら清「何でも宜のら呼んで下さる妻「只今呼ますのらと詮方なく問の襖と開けまして妻「れ静や〜鳥渡此處へお出でお父親の御用だのら何にも恐怖すと母親さんの側に附て居るのら若し父親さんの此なら妻のれ詫と爲て上るのら清「コン〜其様々餘計な事と謂はすとも宜い…此靜此地へ來い〜其處へ据はれ何んだ十七にも成るに親の前でも何でも願着突立て其處へ据はれ妻「此地へれ出清「れ静和女は今日も又遊びに出掛ける積りで其様に着裝飾て居るのの…毎日毎夜日遊び夜遊び宜い氣に成つて遊んで斗り歩行て居て親の薫陶は少しも聽かず…今更暗闇の耻と明朝に出すには及ばぬの實母の氣性と受繼で其分装は何だ和女の母



は大膽にも當店の番頭の竹藏と不埒と働らき和女と四歳の時に置捨にして六百五十兩の大金と
 盛んで跡と眩し未は何處に消光居るやら音信も聞かず其時和女は母と慕しく實母の逃後退ふの
 ら心配して親類とも相談仕たら後妻と貰つて其れに養育て貰へと云ふから聘迎へたは此か妻其
 れのら以來は我子の如く和女と生産の實母よりも能く注意て養育て呉れ夫程まで手足の養育
 びるり誰の庇蔭だ悉皆此の繼母さんの庇蔭其れと思ひころまた夫れ計りの後妻の生産
 だ清之助とは交誼が悪くて天と猿和女の方では弟に愛想と云ふの少しも無く其れはるれにも
 打捨て、置のうの破爪輪と成れば有らう事の案内に出入の仕事師始め大工左官と種々の者と通
 淫其度毎に手切足切と云つて取られる金圓も細少とで無い金圓と吝惜は仕あいの世間に對して
 物笑に成るのの面目ない髪結床坏へ行つても餘所の話で笑はれても若し淫奔娘の親父では無い
 ると笑はれわせぬると虚心表も通行ない程耻入つて居る親の心子知らずと云つて心痛に心配し
 て居ると然うとは思はず此間も寺町の小川坐へ出勤て居る旅俳優の尾上菊壽との云ふ的に幻夢
 と扱し毎日の芝居見物昨日も見物に出掛て行つたと云ふのら跡に尋いて行つて見ると成程機軸
 に和嬢は髪結れよしと下嬢のれ千代と連携て有らふ事の有まい事の女子の性に酒宴として居た

のと儘うに見て來たサア彼の尾上菊壽と交通に爲て居るの又此處で手あり足あり切らねば成ら
 め正直に首へ怪のらぬやつだ如何して其様に實母に似て淫婦の性と引受たの(泣)去年れのくれ
 の祖父さんも臨終の際に和女の淫奔多性と苦に病んでれ逝去成されたワ、(泣)情無い婢
 だ少しは繼母の面前も面目ないと思はないの「父親さん定文句と言つて居るヨ妾の母親さん
 は番頭の竹藏と不義と爲たの金と鈔取で逃走たの妾は四歳の年とので少しも其様な事は了知ア
 仕ませぬにれ意見の時と言ふと必と其れの出まその若し時はたれしも皆ナ一度は浮氣に成るも
 ので妾の事は有り仰在るが妾も人に聞ましたか母親さんは阿部の山家の農民の娘とので十四の
 時と此家に奉公に來て居るうち父親さんが縁設て遂に夫婦に成つて妾が出來たと云ふ事「ナ
 ナ何と怪のらんことこの女め妻「サア、父親さんが何と仰在たどて親に向つて其様と言ふ
 ものでは無い私が手ついで頼むのら二三日は遊に出ない様に爲て居てお呉れ後生だのら貴主
 其れだのら謂はない事では御坐いませぬ血で血と洗ふと云ふたは茲の事で「奇怪奴だ(怒)オ
 、親の不義なぞ云ひ出しやア、つて奇怪奴だ妻「マア御勘弁被成て妾がお静には宜く意見と致
 ます情願れ止怒下さいましお願で御坐いますのらと漸々のことで後妻お妾は亭主清太郎とは

願ひ様にして其坐と立たせまして娘お静と部屋に歸し恰度今夜は町内の寄合と云ふので御亭主と出して遣りまして漸く其場は夫れで静置ましたが暫時過まして此家の下婢お千代が何ら用ひり顔に娘お静と探して居りますのを見て静「お千代ヤ〜お前は何で妾と探して居るのだへ千代〜」
 オ〜〜〜娘さま最前のら探して居りました私の貴嬢に届けて呉れど頼まれたものが有まして懐中のら一封の手紙と取出し千「是れで御坐いますすが私が買物が在つて出ましたか貴嬢様も知てゐざる通り大層芝居が好だもんで買物の途中寺町の小川坐の前と通り度くて其處まで行つてとハ〜と出遇たのハ菊齋親方の弟子で。オ、宜い處でお前さんお遇つた實は是のらこのお文と髮結のおよしさんの處へ持つて行つて娘さんの手に渡して貰ふと思ふ處だがそれでは遅い。急用だのらお前さんにお頼み申すのら直に娘さんの手に届けてお呉れ早く〜と申ましたのら急いで歸つて來ましたか何が書いて有りませその讀んで聞して下さい静「誰の來りやア爲ないのへ千「誰れも來りやア仕ないが若し來ると悪いのら私が來ねへ様に見張と致しますのら開いて讀んで御覽んと下婢の言語にお静は手紙の封目切つ、開く間遲しと一通り目と通して見ますると何の頻りに驚愕た面持で静「お千代ヤ〜此お手紙の様子では大變なとが出来たよ千「如

何ふおとましい事が出来ましたへ静「親方さんは事に依ると當所と出立て甲州へ行のなくてはあらぬトサ今夜にも御出立だとのと然すれば又御目に懸れ無いのら平生の茶屋の駄半に行つて親方に一目遇ひたいかと四方八方と見廻し少々な聲にて静「お父親さんはお宅にお在だらう千「何だの最前旦那様は御町内の寄合で磯馴へお出なさることでお出掛に成りました「ソ……………母親さんはへ千「お風呂で御坐います跡で氣嫌の癒つた時分に娘さまと入浴て呉れろと仰つしやりましたリ静「ナ〜母親さんにはお風呂に入浴て……………お千代やお前氣の毒だが風呂場へ行つて妾に命令て参りましたがれ流洗と致しませうと行つてお流洗と爲て居てお呉れ千「私の宜敷御坐いますか貴嬢の歸へる迄從容と夫れ迄湯に這入て居たらら貴嬢は湯氣に發蒸るだらうじやア有りませしね〜の静「妾が宅へ出られりやア宜いのらお前宜敷様に云つて置いて呉れ千「宜敷御坐い升るれ迄位から何との申して置きますの手紙と其處等に置いて人にも見られては悪ないのら宜敷御坐いますのと云はれて氣の附き手紙とばしといて袂に容れ何と思ひましたの自分の部屋へ這入着代の着物と風呂敷に包み密と親父の部屋に這入りましたの後に悪婆に成りまするれ静の事ゆへ手箱の裡のら二百兩の大金と鈔取り甲夜暗と僮伴に密と握

け出し人目に見ぬ機にと急足に高野町の四角に参りますと、ハッと人に突當りました。「これは御免遊ばしませぬ男、イヤ私も急ぎ参りまして誠に突當りました御免おそつて静、親方さんでは御坐いませぬ男、「オヤお嬢様の今貴嬢さんに逢ひ度と實は最前のら黙半に待つて居りましたが一向便りが有りませぬのら待兼まして黙半と出て参りました處是のら貴嬢の庭口へ行つてトン／＼と平生の相圖とさめ込んで貴嬢さんに遇はうと思ふて………定めて最前の文で様子は會得でせうが兎角演劇の内幕と云ふものは面倒なもので私は体と抜て仕舞なければ成りませぬのうして私の体は最う甲州へ賣れて居りますのら私だけ足と抜て彼地へ行かねば成りませぬそれで貴嬢にお目に懸りね暇乞と爲て今夜の内に此地とは抜けます積り茲でお目に懸るは盡せぬ縁最う私の念も通り思ひにく事は御坐いませぬ是れでお袂別で御坐い升と謂はれてお静は泪ぐみ静、「親方さん其りやあんまりで御坐い升妾の様なものと今迄も可愛がつて下さつた故へ私や其お情に絆されて死でも汝と別離る氣は御坐いませぬ最前も彼のれ手紙と頂戴さました様子は譯りましたから妾は身仕度と致して着代の衣類も是だけまだ路金にと親父のお金と二百兩持参て來ました情願携運て逃走てお呉れ菊、「其れは宜く二百兩持参てお出で御坐いますの

フン………左様云ふね心ならずは是のら直に裏通と参りまして竹與と頼み餘分に酒代と遣りましたら江尻と越して直ぐに今夜のうちに帆ののけて奥津まで行きますれば追手に出遇心配は御坐いませぬ貴嬢にお目に懸つたが僥倖で静、「アモシ親方へ貴郎は甲州路に帆と掛けると仰しやるが甲州は山峠は有りて船は無いと云ふとですの何處の川と帆のけてお出だす菊、「ハハハハ、否其れは役者仲間での符牒で逃走と爲るとと帆と掛けると云ふので甲州路は藤川と上つて蹴澤に行く川船斗りし御坐いませぬ夫よりの竹與屋さへ強負なら翌日山としと致升のらと包みし着類は尾上菊壽が背負まして兩人は人目と憚り逸足早く立場まで参りまして竹與と雇ひお静と乗せまして急ぎに急で江尻と過て奥津の清水屋と云ふ旅宿に着きました兩人は案内に連れて坐敷に通リホツと一息いたしまして先づ此處迄來れば大丈夫と酒下物と命じましてお互に酒宴と始めました菊、「お嬢さん今頃は定めてお宅では大變な騒ぎでせうな探索てお在いせう静、親方へ大丈夫で御坐いますヨ親父さんは平常……と勘當なさると云つて居ります母は繼母で御坐いますから弟の清之助に世帯と譲りますのら私の居ないの宜い鹽梅とと思ふくらいで尙更探がす氣支は御坐いませぬ父親さんは妾には呆れて居ます菊、「夫じやア随分能い男もお在被成です

ろうして今夜は早く寐やうじやア御坐いませぬのト互に酒と酌はして稍酔が廻つたと見へ寐
お附きまして程あくつこのれ寝入にぐつそりと寢込で仕舞ましたか明る朝も成つてガラ／＼と戸
と明けます音にお静は目と覺して四方と見ますると側に寝て居た尾上菊壽は何時の間にやら脱
蟬の殻ハテナと布團の下に入れて置いた金子の胴巻と見まするお是さへ皆目行術が知れど驚愕
致し飛起て金子の紛失爲た事と亭主に掛合ひますと亭「ろりや大變で御坐ります今貴娘のお尋
になるお連れの方は今朝まだ暗いうちに清水港まで用が有るのら行つて来るが彼娘は寢坊が持
病だのら寢足りないに起しでもすると直ぐ血の道と起す女だのら目の覺る迄寢らして置いて呉
れと仰在たのら雨戸も明けずに置らふと思いましたが隣室のお客様が暗い雨戸と明けると仰
しやつた故片方はのり開ける譯には参りませす下婢に命けて開けさせましたか貴娘のお連れを
らす荷物と持参てお出で成さつた斗りの大金までとは如何云ふ譯で御坐いませその掻摘て心得の
爲めお聞被成て下さる静「ハイ今と成つては親の名前は申されませぬの妻は靜岡の本通の商人
の娘で御坐り升が間所寺町の小川坐へ出勤て居りました旅役者の尾上菊壽と申すものに欺れま

して妻は親の金二百兩と持て此所まで連れられて参りましたが今朝目の覺めて見ますれば菊壽
の影は何處へやら金さへ持つて逃げられましたは私は捨られましたに違ひ御坐いません今こ
親の罰と思ひ知りました最う宅へは歸る事は出来ませぬ此上は淵川へ身と投て死ぬより外に仕
様は御坐いませぬ(泣)亭「ハア如何も美麗な男だと思ひ居りましたに夫れじやア噂お聞た旅役
者の尾上菊壽とは彼的の事でヘ……ちやア彼男に誑されてお宅へお歸りなさるとは出来
ませんの嗚呼お氣毒ナとだマアお案じ成さいますナ私に如何様にも骨と折つて必とお宅へお返
へし申ますのら宅へお歸成さぬ死ねなぞと云ふは了簡違ひだ静「御心切に難有う存知ますが
母が違つて居ります故中々宅への這入ませんと話し最中へ襖と開けて旅人「御免下さいア此宅
の御主人でこの今しがた日記と附けて居りましたら何の取込の御様子と襖越にて承りましたに
お悠然にマア旅役者に誑されて連れて逃げられ家へは歸れず身でも投て死ななければ成らぬマ
ア此様な娘子と誑し連れ出すなんて奇怪ぬ奴で御坐いませ私や聞てさへ餘り口惜いから如何な
役者の存知ませぬが私の江戸の品川の宿で甲州屋治兵衛と云ふ葉茶屋商人で御坐いませ私
口のら斯ふ云ふと可笑が店の者も五人や六人は使つて居り舛もの此度も茶と仕入の用て此靜岡

へ参りましたが此宅へは昨夜が始めて、御坐いませどがどうも人事に爲る聞捨のならないは江戸子の氣質で江戸には尾上菊五郎と云ふて尾上派の總理と爲て居ります役者が有りませすが今も聞けば尾上菊五郎と云ふらば尾上菊五郎の弟子に相違御坐いませんら好旅ら旅へかけて渡つて居やうとも彼の親方に頼んで探索て見たら直に譚る事でそれに中々行届いて居る人だらう此お娘御は私が身に引受て行立様に爲て上るら死ぬと云ふとお止めあすつて其菊五郎と云ふ奴の在所と聞正其奴と談判と透けて遣りませうらお宅へ詫と仕て歸さうより如何で御坐いませ私にお任せあさい必と母と明けて上げませうら「是れは有がとうぞんじませ御深切に宜うれ氣がね附き下さいました成程品川の甲州屋さんの仰しやる處に至極汚尤此の娘御の身の上と萬事お頼み申しますして何卒首尾よく探がし當て、事が済みましたらお娘御のお宅へお歸りになる様に義「へい」くれば宜しう御座い開悪の様に致しませぬ「誠」に御深切お難有存知ませ既に親の罰で思ふ人には捨られます宅へは歸れぬ仕儀と成りいつそ死んで仕舞うと存知ました處有難う存じます是ら探し出して取られました金丈けでも思ひませすが責めて半分でも聞達いたして親の處も歸る心で御座いませ其れは然うと此宅へ泊つた昨晚のら旅籠の料取られま

した外は少しの手配も御座いませんで此在の擲に困ります「如何致して此のお娘さんのと頂戴了簡では御座いませぬ「いへ何」に此れ娘子の勘定は私が致しますればのりの道中筋の諸入費も私が致しますらと安受合に受合つて其宅の勘定と致して支度と調のへた静と連携て立出ましたのさて此者の善の悪の將たお静の身の成行は如何相成ますの次回までお預のりに致します

第四回

「人心鏡にのけて寫るなら左こそや影の見悪くのらんと申しませ古歌が御坐いませどが人の心の裡と言ふものゝ表面のらは隠りませんもので十人寄れば十色の顔付此人は善良人と思ふ人にも悪心の人ゝ多く有ませぬもので中々表面のらは人の心は知れませぬもので前回申上りました東京の片南ある品川宿の葉茶屋商人で甲州屋治兵衛と名號まして駿州興津の清水屋と申す旅宿屋のら娘を静と助けて品川宿まで連携て参りは致しましたの宿の中程より右にされ東海寺の片傍に有る一軒家の門口に來り岩「サア此地へ來ねへ」遠慮なんざア入るもの今日からは自宅に居なけりやア成らねニサア此地へ這入たナニ家婦に挨拶するのに極が惡いから何にも極も何

にも入るものか遊歴する様な婦じやアねーら此地へお出是女は吾のしたばだ心易く成らねへ
 じやアいけねへナア噫今日この此娘と娘同様に思ふて置いて呉れロヨお静さん挨拶と爲ねへ
 と言はれてお静は心付き「御免くださいまし申運ましてお始にお目に掛りました静と申ま
 す不調法もので旦那様には色々と御厄介に成りまして以後は御懇意願ひませう」さう了算に手
 とつして挨拶と爲れては困るヨ眞誠に困るじやアないの手と上げてお呉れ其様に四角張れると
 困るヨ私は挨拶が出来ないマア草臥たらうのら平坐でもおのきな岩「ム、ム、(笑)馬鹿と云へ十
 七八の娘盛で平坐がのけるものかお静斯ふ云ふ様な氣輕なものだのら從容して居るが宜マア
 一杯飲らう久しふりで酒の面と見るんだ此娘も少とは飲るのら此財布のら錢と持つて行つて下
 物は差身が宜いな何の生で以てとぐに食れる様なものを何でもい、のら見繕つてさうして何は
 五合瓶じやア足りねえ一升斗りで宜らう一寸行つて来て呉れ女「あ、彼のお静さん来るか
 ら早々使立て、は濟ないがお氣毒だがね火鉢に消炭と入て少しおのんの出来る様に爲てお呉れ
 私や一走行つて来るヨ岩「さうだ、厨下の事にも熱れなければいけねえのらナ、ろんなに煽
 があくにも鉄瓶と掛けて置いておんせへ附けば宜ら何んだ寒いと思つたら後と閉て行けば宜に

下主の三寸トいふが一尺斗り明て行きやアがつたお静閉て呉れ是から和女幾日吾處に居るの知
 れぬへで心配なく居るが宜せ、お静は最前より陰鬱て居りましたが治兵衛の側へ参りまして「静
 「旦那様、何だへ道中のうちは旦那と云はねえぢやア都合が悪いのら旦那と云はせれたの
 だ宅へ歸へて迄も其様な事と云つて居て呉れるなへ静「貴郎の仰しやりますには東京の品川で
 甲州屋治兵衛と云ふ葉茶屋の商人と奉公人も五六人使つて居ると仰しやつたが此處の違つて居
 るお宅で御座りますの「ハ、ハ、ハ、(嘲笑)和女己と未だ正眞の葉茶屋商人と思つて居るの成
 程大家のお嬢様だ情人と拵へて親の金圓と鋳取で逃げる様にも似合ねえ彼事皆虚言だ葉茶屋の
 亭主と云ふたのは虚言だヨ此品川の奥馬場に店借として粟札に石井岩五郎と立派に名前を出て
 居るが種は甲州岩と云ふ甲州の地と食詰者だ東海道斗りでは無へ五街道と股に掛けお前の様な
 無注意したもの強拐束の者は西へ賣り南の者は北へ賣り年のら年中強拐と家業に爲て居るの
 だ相手の有るまで宅に居るのだト云はれてお静は悲げに泣出しますヨ岩「何と泣んだ泣くこと
 の少とも無へぢやア無へる愉人と拵へ親の金圓と持出し其情人には捨られて身でも投げ無ぢや
 ア申譯が無へと死のうとまで爲た和女と扶けて遣つた命の親だ身と捨て、ころ浮ひ瀬も有らア

今に箱館へでも身賣つて遣るのら良し大變にでも受出れりやア姓無くして王の興業譽榮華も仕
 たい放題買られるのと待つて居るが宜し「死なうとまで致した處とば御親切に可愛がつて降
 さりますのら……お家婦の面前では申されませぬが貴郎のれ情で添臥と致まして宅へ歸れば女
 房に爲て遣ると仰しやつたふ今來て見れば家婦がお成さいますし如何致ましたら宜し御座
 いますの岩「馬鹿と云ふあへ道中での抱寝はお前斗りぢやア無へヨ吾ア年中旅先で騙誘て連れ
 て来る女は皆抱寝と爲て居る事ヲ旅で淋く成たのらつて娼妓買と爲れば金が費るのら此位など
 は噂も承知爲て居るワ、あいつは己よりは最一増悪るいとは輪と掛た女だ東海道の藤澤宿で
 鬼武藏と云ふ女郎屋で枕提しのお藤と云ふて客の寝處とさすが家業だといつと内所の尻金と
 ついて連れて來た己の下場サ幾等昔遊女でも喰つく氣間は無へ其様と云はねへで相手の有るま
 で此宅に居ねへ「妾は當家に参りましたら貴郎と俱に添れる事と思ひましたに彼な立派なお
 家婦が有らうと云ふと夢にも知せて降つたら道中筋でお情とば受けませぬもの唯貴郎の女房
 と成つてお側居られること思ふて居りましたにお家婦の彼云ふお方では所詮仕様の御座りま
 せぬが情願お情に娼妓お賣る事斗りはお免なすつて何様お苦い事でも妾は否とは申しませぬの

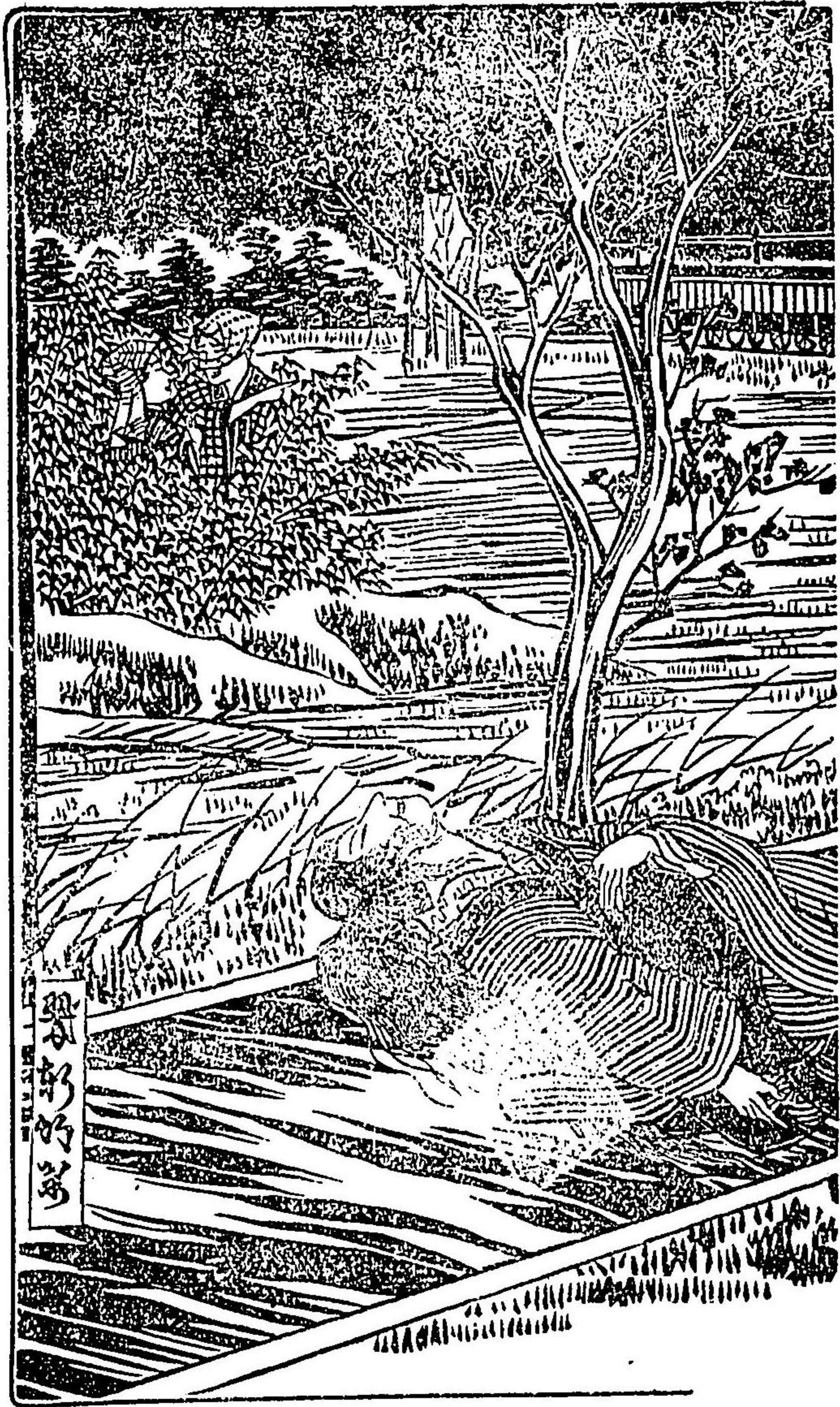
ら御際に居て下さいまし岩「何と……己が旅中筋抱寝と爲た情に絆て娼妓に賣る事は止て呉
 れるぢやア和女の袖妻と引たのも義理に迫つて無據枕交したと思つたに宅に置て呉る側に
 居てハ……左様かとう云ふ了簡とに知らねへもんだのら娼妓に賣の何のと種ノくに云つたん
 だがお前の様な娘御に左様言はれりやアナアニ彼ナ婆々は捨て仕舞何も代婦せへ出來りやア彼
 ナ女は何日何時でも捨て、仕舞のさや和女がう云ふ心なら己が彼女と瞞若て宅に置から發覺れ
 ちやアいけねへせ「貴郎が遠方に賣つてさ下さりませぬなら如何様にも苦勞と致ます 岩「
 可世くマアレお藤が歸つて來た泪と拭て覺知れるナ左様のそらとは知らあつたと言ふ處へ
 門口のら藤「彼ささしみ有たよ 岩「お御苦勞く何だ何でも宜い摺りねへト酒と問徳利にうつ
 して鉄瓶に押込膳立と致して久振だと云ふので夫婦の間に静と介み互に盃と廻りしお
 静も少し飲める口暫時酒宴お時と移りましたが最うお静は草臥て居るのら睡たのらうと二階お
 上げて寐のしましたが其より夫婦は火鉢の脇で差向で飲で居りましたが「ちよいと宜娘だね
 へ餘程宜い娘だね 岩「どうだ上美娘だらう彼は駿州静岡の良商處のお嬢さんだらうたが興津
 の清水屋と云ふ旅宿屋で尾上菊壽と云ふ旅役者と逃走て來て其情人に捨てられて身でも投やう

と云ふ處と隣座敷で聞込んで旅宿屋の主人と瞞着して宜食物と連携て來たのだ 藤「又相變らす道中で犯通で來たらしいね 岩」そりやア當然サ 藤「どうも通例と違つて娘が美麗のら氣が探める 岩」何だナ嫉妬なんぞ云ふ様な夫婦じやアねへは 藤「何處へ賣つて遣る積りだな 岩」そうサ今度娘が美のら堅手と利益やうと思ふんだが箱館杯が宜なマ何しろ賣物だのら厨下でも働かしてものきれとぞ切らすと不可へのだ宅の娘見たやうに大切を爲て呉れ若類から頭髪の裝飾まで注意て 藤「ハ、何だの今このら金と懐に入れた様に思ふワ 岩」其様に慾張なト其夜は濟んで仕舞ました但其れをらだお藤も我娘のやうにお静と可愛がり髪の裝飾をら何くれとなく氣とつけて何事も荒仕事は爲ぬ様にして良い買手の有るのを待つて居ましたぐく〜敷事は岩略まして其年は明治元年のとで隙行く駒に關守無くはや三年と経過しましたに其間誰が來てもお静と賣氣色も無く其儘にして置きましたが頃しも十二月廿一日のと寒風の肌と烈斗りにて堪り兼ねます 處岩五郎は用事と見へて戶外に行き日暮れ時分に歸り來り我宅の門口をら 岩「ア、寒い何だ又酒の澄して内で以て獨酒宴剛氣だナれ藤やい亭主が歸へつて來たに大盃ので一杯呈して呉れても宜ぢやア無へのナ、何と可笑と爲るナ 藤」何だへ(ゲツッ)(エ、何だへ 岩)酔て居やアがるナ

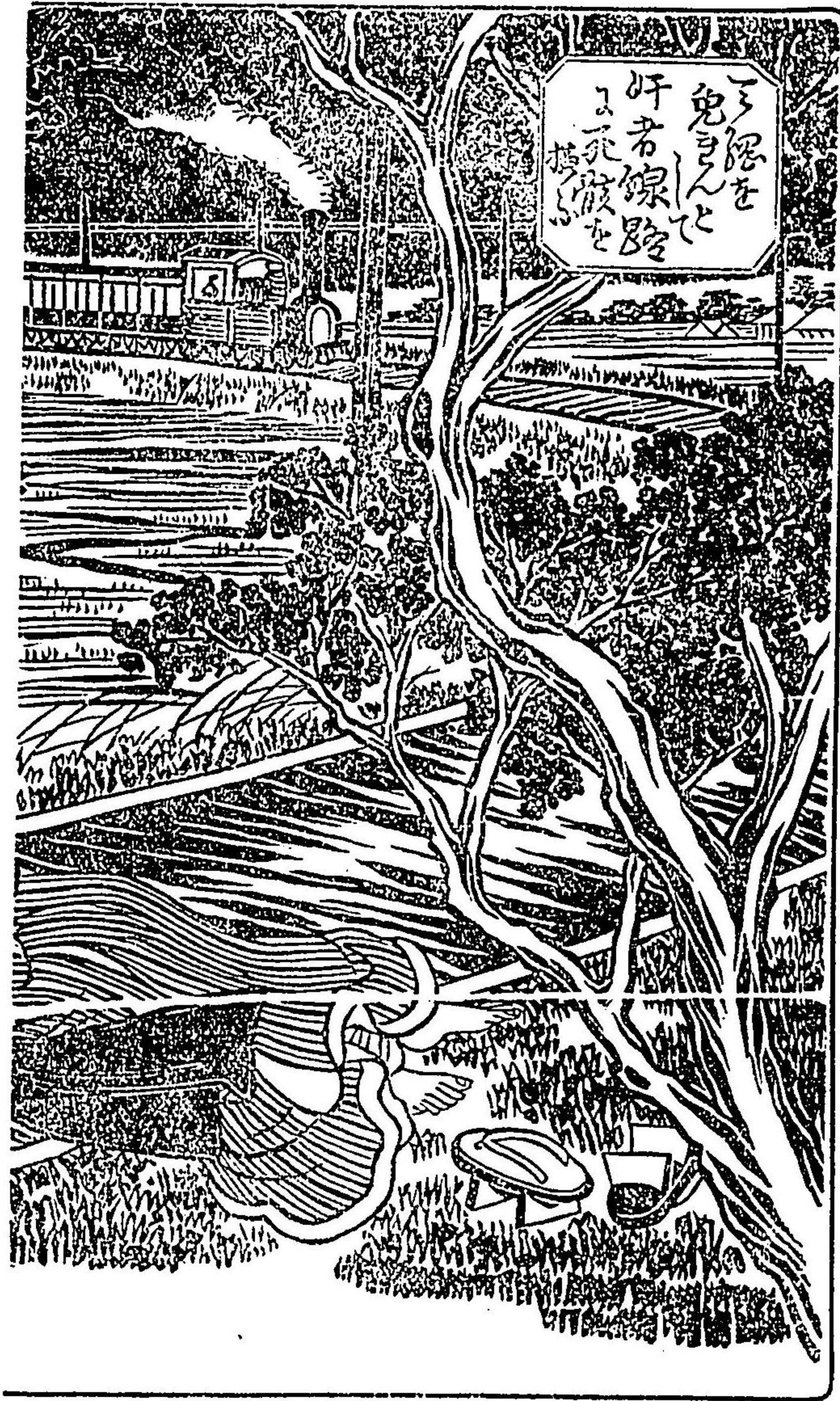
藤「何だトエ已に大盃ので呈とれいてお呉妻やア買てサ妻やア自分で飲で居る酒だワチ和郎飲たければ静にでも酌と爲て貰つてお飲ナ人の酒と減にやア及ばねへ妻やア外に樂が無いのら酒位へ飲んだつて(ゲツッ)搦ふものかへ飲たけりやアお静とれ飲りお静と 岩」何だ着の上げ下しにもお静〜と云やアがる東京へ歸つてをら和女て云ふ噂が有るのだのらお静の傍へだつて往つた事は無へに何と不解へ事と云ふんだ 藤「何も不解ねへことと云やア爲ねへヨ妻やア整然知て居るヨ宅ぢやア會引と爲なくつても戶外へ連れて出て會引と爲て居るのぞ知つて居るヨ三年越も如何様相手が來ても相談と決定た事ねへぢやア無の今迄の女のものと半歳と食せて置た事は無へは 岩」そうヨ今迄の娘と違つて上美嬢ぢやアねへの其れで高價のつくまで置くのだ 藤「妾などは死でもおれば宜と思ふて居るの知らねへが妾は死で化て出ても此宅に据つて居るヨ妾だつても面白も爲へぢやアねへの互に悪事と爲て 岩」是れ何と大きな聲で云ふ和女が饒舌りやア已も云ふがマアお静と何處へなり安價つても叩賣て仕舞のら左様怒らずと吾に「盃呈て呉れ 藤」不可ヨ何だへ安くつても宜いのら賣るへお前此近傍に賣られて堪るもの吉原や此宿や根津や新宿へ賣られて始終會引と爲れてはあんなり面に泥と捺れる様なものだれ互に悪事を

仕合て子夫婦に成つたのだら己の話を聞いて呉れナ。大きな聲を爲るナ大丈夫だヨト益々大聲を揚げて狂氣の如く身と怒し立ちあがつて廊下より晝間着屋に研せて置たる斯ふ云ふ時の間合と出刃庖丁と手に持ちましてゾット元の處へ來て藤「サア此庖丁で今にお静の歸て來たら斬つた呉れ彼女と研つて殺して呉れ彼女と研るのが出來なければ男らしく離縁状を書て和女と離別のらと出して御覽出せるなら出てくれ岩「マア其様と云ふあへ研つて仕舞て一文にも成るあへ今に金お爲のら待て居る藤「妾は金は慾ない(泣)和郎は未だ彼女に未練が有るのサア是れで己と斬れ研りやアがれ(泣)岩「此女黙言て居ればつけ上り良氣に成ては藤サア望の通り斬て道るト出刃庖丁と振上る處へ門口明歸りのつたれ静は驚き宅へ這入静「姉さんどうぞ逃げて親方其れでは私が困るヨ(泣)お願ひのら私が困るヨ」と岩五郎に取つき支へ止めます物とせず岩「太い女だハア」大きなハア藤「斬れサア斬れサア殺せサア」一所に成て己と殺す氣だナ静「親方後生だのらア親方(泣)庖丁ともぎとる藤「サア殺せサア」和郎ハナ悪事の有る奴」岩「此女高い聲とするなれ藤の口と押へ様とする藤「アレ人殺……」岩「是つまらねへ事とぬのしやアがるナと静戶外と明て見て呉れ人の通處では無へが餘り大きな聲とハアハア出しやアが

るから表と見て呉れお静」藤「人殺し岩「何と不解ぬ事と云しやアがる静「ハア」親方静が降つて來て誰も戶外の通させぬヨハア」岩「和女己の悪事と饒舌て、(驚愕の形状)ア、静「如何爲ました」岩「吾が口と押へた積りで咽喉と押へて仕舞たハア」静「ムけない事と爲たじやアあいのねハア何だナ」岩「ハア飲ませるものと静「アイ」と震ながら水と茶碗に汲で來て静「サア親方」岩「おい來た」と口に入れ岩「ア、飲んで仕舞た早く」静「仕様が無いねト又汲んで來ましてサアト岩五郎に渡すと口に含む藤の体へさりと吹きまして「サア堅平爲ると暫く見詰て居りましたが岩「いけね」静「否ないつて如何爲るんだナ」岩「最ういけ無へはどうせ一度は死ぬ奴だが煙の上で死だのと結句優と爲て人に知れねへ中に死骸と捨て、仕舞たいものだ」静「重しでも附けて井戸の中へ入れてお仕舞ナ」岩「不可へ其様古工風なとでいくもの」日からが立と髪や油が浮て來て直露見するは、れ静宜事有る剛氣な事有るせ此東海寺の裏に線路が布て有る新橋のら横濱に通ふ蒸氣車は今年始めて出來た斗りだがナ静「左様のへ其れじやアいつそ其列車に乗て横濱まで送つて仕舞たら如何ですな」岩「其様馬鹿な事が出來もの彼の線路にまだ最終蒸氣車に間もあるのら此死骸と變りして置て咽喉でも曳らせりやア一寸も隠



野村の
山



多
鬼
汗
者
線
を
持
て
た
を

らねへそうして家主へ夜が明てゐら女房は藤は何處へ参りましたが昨夜酒に酔ひまして家出と致した限り未だに歸つて来ませんから諸々探索しましたが一向譯りませぬト届けて置けば己の罪には成らねへ如何だへ静「其れは宜思附ですなエト兩人は示し合せまして人目に懸らぬうちにと岩五郎は女房に藤の死骸と背負出して線路に之れと乘りまして其場と立去東海寺の敷に隠れて見て居る間も無く横濱のらの最終列車で無残にも藤の死骸は多くの列車に良られましたが是れ所詮毒手と以て毒手と斃す如何なる造化の戯れに出でましたら此段落は次回演し上

第五回

「引續きまして一席申上ひまとは静岡土産伊豆の吉松の情話で甲州無宿の岩五郎は前回は申上ました如く女房に藤と殺害と致しましてのらどうも御氣味悪く思ひますので品川とは引越まして下谷萬年町へ住らへましたか或日のこと壹人の男の門口のら「御免成せいましエー門口の札で大概は譯つて居りやすが若し違ひましたら御免下さい岩五郎假兄の宅の此地で御座いますの「ハイ石井岩五郎は手前て御座いますの何處のら御越した「オ、假兄お前さんの聲音と聽

て安心爲ました誠にお驚らくどうも「オ、野州熊ぢやア無へのマア遠慮なく上つて呉れ「假兄御免ヨ只今御挨拶と致しやそのらト上へ上る「マア暫くだつたナアお静久しく宅へ來ねへけれども此者は野州熊と云ふて吾儕の假兄弟分だ挨拶と爲ねへ静「お前さん此地等へお上り成すつて下さりまし熊「ハイどうも御無沙汰と爲まして済みません昨日は假兄八王子と出立やして多分假兄の處在は品川に在ると心得彼方へ行つて尋ねて見たが何處へ移轉たか一向に譯らねへのら其のら是りやア吉原へ行つて聞いて見りやア直ぐ譯るだらうと其足で吉原へ行き心當りの朋友と二三人訪問て見やしたがどうも譯らねへのら遂に昨晚は吉原で遊んで仕舞其のら今朝フィと心附き田町の假親の所へ行つて聞いて見るとそりや直ぐ譯るは岩公の所へ今は下谷萬年町大金魚屋の裏の町で廣い原と見たやうな處と通つて行くと農家と見た様多き家の家だのら直ぐ知れるとの事て来て見たが若しか違つちやアさまりがわるいから其れ故尋ねたんだが假兄は健壯で結構ですナ大層お肥満なすつたね「イヤ吾儕より前も見違る程肥満ぢやアねーの……お静今云ふ通り野州熊と云ふものだ今では八王子で世帯と持つて居るのだが是のら懇意く成るのだ挨拶と爲ねへ熊「ヒヤア此姉公は假兄さんので御座いますのヘエー先の姉公は……

：フン最う以前に死去りましたへエ角様でちつとも知りませぬでした其の兎も左も是れは姉公
 始めまして吾儕は野州熊どもチャラ熊ども謂ひますが漸々に開化て来る世の中ではチャラ熊で
 は通用せんぬら最うな廢です今じやア堅氣に成りまして八王子に世帯と持つて嗅アもあり子
 も有ますが此後は御懇意く願ひます今日は假兄お少し斗り用事が有つて出て來やした静「始ま
 してお目に懸りませが静と申しませ無調法もの幾久しくたこゝろやすく願ひます岩「サア
 〱挨拶が済だら一杯つける熊「假兄急に前さんに少し儲けさせてい事が在つて出掛て來や
 したが岩「ハ、ア其れは耳寄な話尙ほ更まへ祝に一杯遣らうな静のんと附て持つて來い早く出
 そが宜い。フン早速如何云ふ話だの聞てへナ頃日は儲け事業の口と久しく聞のねーで實に仕様
 が無へ儲口とは如何ナ事だへ熊「外じやアねーが右のら左に百圓は必然利益る事業儲のつた上
 で十五でも二十でも吾儕に骨折のらと下さるのど快樂に八王子のら出て來たのが早速話と
 致やと岩「大きな聲と爲るぢやアねーの静のに話たら如何たへ熊「ハイ〱久しく田舎で生計
 たのら聲が大きくなつてト小聲に成りまして船「外ぢやア御座いませんが八王子の吾妻屋の宅
 に美しい婦女が一人居ますかね是と私が必易く成つて話と爲て見ると元は士族さんの娘どので瓦

解に成らぬうちに娼妓に成つたらうだの其當時は江戸で娼妓に成るのは恥しいとかで遂に流れ
 〱て八王子に來て娼妓と爲て居るも始めは江戸ではと思ふたの八王子などの驛女郎に成つて
 居たんで段々借金が重んで返済無ければ身の浮む瀬が無いのら是のら東京に行つて一稼ぎ
 爲たいのら住變と爲せて下さらないかト眞身に成つての話だのら何程位な金だぞ聞いて見ると
 百圓あれば身脱が出來とのと其婦女の如何な事と爲ても二百圓のもの有るのら百圓の金子と
 調達へさへすれば直ぐに百圓折に成る仕事だが假兄も知て居る通り如何も百圓と云ふ金は吾に
 は出來ねーのらト云つて人にでも先探とされて仕舞へば仕様が無へら東京へ行つたら百圓位
 な金は調達るだらうと嗅アにも頻りに話と吹込まれたのら假兄の事だのら出來様と來たんだが
 如何だらう話が決定やア吾妻家の内証へ話と爲て直ぐに私は見事身受と爲て私やア撥出て來る
 積りだが半肩乗つて下さらねへる岩「熊手前態々深切に八王子のら東京まで宜い種と持つて來て
 呉れたのら返辭と仕度が今ぢやア吾儕も五十圓の金も工風は出來ねへがマア如何の仕やうの
 らのんが附たのら一杯遣ねエお静酌と爲る今話して爲るのら船「こりやアお静さん誠に御馳走
 様假兄久振りだねニ酒宴と爲るは静「ハイ御免下さいお酌と熊「是は〱最うあります〱岩「

「ア遠慮為ねへで飲で呉れ吾儕は二三日飲ついで十分だからサア〜お前の方へ徳利と渡し
て遣う勝手について飲が宜い八王子より持つて来て呉れたら早速と思ふけれども何しろ金圓
は最前も云ふ通りの譯で急々の事は行ねエがと思案と致しながら若「熊や物は商議だが先の
噂アと違つて此れ静は年齢は若し吾儕の口より噂アの自慢を爲るは變たらうが女は美艶氣も利
たものだから其吾妻屋へ百圓の方に話と仕て見て貰ひ度が如何だらう出来ぬへる熊「エ何と共
れぢやア姉公と百圓の方に其りやア姉公なら大丈夫ですニへ何でも此宅へ来た時此女の賣物に
違げへねへと思ふて居たに假兄の姉さんと聞いて實は書餅たと思つたの其りやア姉さんと連携
て行つたから如何でも話が決定りませう若「お前の眼て見て宜と云ふのならどうだへ膝とみ談
合と云ふ譯だがナニ大丈夫だ其れぢやア左様云ふ事にして……れ静今も聽て居る通りな譯で此
者が久し振に八王子より来て吾儕も儲けさせ様と云ふのだから頼た八王子の吾妻屋へ金圓の
方に行つて呉れぢやア如何だトお静は最前よりの話と聞きムツと爲て静「戲談と云つちやア思
なへヨ止てお呉れ御免だヨ一最前のら黙言て聽いて居ればお前さんと二人で勝手な話斗りして
お在だがナニも賣られる位なら東海道の興津の宿で思ふ男に捨てられ和郎に救はれ品川に

て来られ其時にさへ娼妓に成つて毎晩變るお客と取るの苦しいら貧亡世帯と承知で斯ふ爲
て苦勞して居るのに氣樂と云つちやアいけるいヨ誰が娼妓なんぞに成る奴が有るものぢ其れ
ぢやア(泣)和郎餘まり苛烈ぢやア無い(泣)若「ナニと泣きやアがるんだ譯と云つて人が願ひ
のと半分も聽さやアがらねへでナニ娼妓に成らねへ能く考へて見やアがれ此岩五郎さんが救
助成すつて四五年も面倒と見て居るぞ今に成つて始めて和女に頼のだ其れも賣るのぢやア無へ
ワ先方へ和女と預けて置て先方の女と引取て来るまでの代品に百圓の方に預けて置のだ先方の
女と二百圓に賣つて仕舞は直ぐに和女と受出のだ和女と見世に出ると云ふのぢやア無へワ此位
の事が譯ねへる静「娼妓に成りやアお客と取らないぢやア慮らぬいリヲ(泣)人と瞞着たつては
けないよれ客と取らねへ娼妓衆が有るものか子熊「姉さん娼妓に行きやア死やうな苦みだと思
ふだらうぢ其様な事は有りやア仕ません假兄が困ると先の姉公なんぞはちよい〜と娼妓に行
きましたヨ姉公お前さんの古郷は駿州静岡の大家の娘だと云ふがそれ故味ゑ〜少しも譯らね
へが泣ちやア困難チーお進申すで〜無いが吾やア假兄も儲けさせ度つて左様すりやア二十や三
十の金圓は貰へると云ふので泣ちやア困る進めると思はれては困るが遙〜と八王子より来て

昨晚のら今朝まで假兄と探して居るやうな深切なものだ和女さんの懸と先方へ預けて先方の女と引取て二百圓に沈めて其内百圓と持つて和女さんと引のへに仕て来るのだ早く云やア人間の質の入換の様なものですワマと託言交りに理屈のやうに云ひ並べるのと耳へも入れずお静は聞分ける様子が御座いませぬのら岩五郎は怒り立ち岩「最う止しねへ話と爲たどて解了りやア爲ねへ宜り其女の方に行のねへらどて叩賣つて飼ものに爲るのら左様思へ熊「假兄左様憤怒に思つちやア困る姉さんく今云ふ通りな譯で先方へ行つても見世へ出なくつても直に引換へに歸れる様に仕ますのら得心なすつてれ呉なさいト云はれてお静は泪と拭ひ静「ハイ斯ふ云ふ氣の荒い人だと云ふ事は知つて居ります解譯ましたく妾は當分の間人間の質に行きます岩さん大さと思ひ違ひと爲まして勘忍してお呉れ承知で往りますヨ併し岩さん典物と決つたら行きますがね流しちやア不可ないヨトお静の首領に岩五郎少し落着き岩「流のす氣支への無へ大丈夫だく熊「其れじやア宜敷御座まどの姉公の得心爲て呉れてヤレく有難い岩「宜いも悪いも無へ是のら仕度として行くのらお前一足先へ行つて呉れ熊「うれぢやア私は先へ車に乗つて歸り先方へ話と決て置ますのら何れ彼地でれ目に懸ますからお静さんイヤ姉公何にも氣と揉ねへで此

宅に居るも同然に入王子へ行つたつてノホ、ンで消光て居れば宜しう御座いますワ宜敷のへくぢやア御免下さいヨ岩「跡の事は心配爲ねへで行の宜いト野州熊と岩五郎と目と目で知せ合ひまして立別れましたが岩五郎が跡と早々と取方附けて二三日旅行と爲まどのら何分宜敷と大家へ断はつて兩隣の無いが結局氣樂だと泣沈み居ります静と促がして神田の馬車會社より正午十二時發の馬車に乗まして段々と府中の宿と後に致して五宿の驛に参りました時は最う日の暮のりります故お静はお腹が痛んで苦しのら馬車は断はつて呉れと云ふので此宿の立湯茶屋に休んで介抱致し夕飯の仕度も充分致しまして身仕度を調へ此家と立出でましたがお静はお腹が痛むのら馬車も人力車も否だと云ふので車も雇はず徒足にて入王子手まの日の野原にかゝりました月が時々雲と吐ますのら道路の便りに成ります岩「お静堅平爲て歩いて呉ねぢやア困難せ其様に腹が痛の眩暈がするの何の蚊のと云ふて今だにお嬢さん育ちぢやア仕様が無へは甲州無宿の岩五郎の噂アぞやアねー堅平爲て歩きねへアレ又屈腰こんだ仕様が無へぢやアねへ静「其様にお言でも病氣だのら仕様が無ワチ後生だのら静のに歩いてお呉ヨ……其りやア入王子の飯盛の様にやア行のらないワチ静岡の本通りの大家のお嬢様だものどうで飯盛の様に



やア行のないう岩「ナニと如何爲たと静岡の大家のお嬢さままで八王子の飯盛の様には行つねへ
 此女もと言せも敢すお静は突出した出刃庖丁で岩五郎の弱腹とツツサリッ」と一突ツと叫びな
 がら齧掻途端に荷物は後ろに飛で仕舞岩五郎はア一人殺しくと聲を立てゝも立ませぬのら野
 田打廻つて苦しむのとまたも肩先四五寸斬り下げられ漸々と弱つてハツツキリ其處へ倒れるの
 見とお静は側へ寄り附「岩さん長い間の世話に成つて殺しては濟まいが和郎の言に随がつて娼
 妓に此身と沈めて仕舞やア生涯淨も瀬が無いのら此間だのら逃出らうと思ふた事も幾度の和郎
 は八王子の吾妻家に妾の身とば入換て先の女と女房に爲たし斗りの今日の魂膽委曲い書簡は此
 間拾うて様子は知れて有る皆拵へ事で妾とは騙して曲げる了簡と譯つた故に擬病氣最前茶屋で
 休んだ際そつと瞞着盗んで来た此の出刃庖丁も拂子の換り引導渡す趣旨と爲つた岩さん何卒往
 生して死で御呉れヨト虫の息に成て居る岩五郎の襟の當りのら咽と規らつてグッと一突十々目
 と差て人目に掛らぬ其内にと急ぎ足にて行き過ぎましたの何時の間にもやら大樹の木蔭より出ま
 した一人の旅人は管笠と頭りに頂さ少々な荷物と肩を掛まして前に進まふと云ふれ静の前に立
 ふさがり旅人「お静ぢやア無へかれ静さん吾儕の顔と見て解るだらうがお前と奥津の清水屋で

置去に爲た尾上菊蔭だコレ此通り手と合せて拜む詫る私の心の裡落着て一通り聞いてお呉れ彼
 の間和女と置去りに二百圓の金と衣類と持逃に爲て逃ては見たが其のらは何處へ行つても物事
 が鳩の嘴程くひ違ひ賭博には負け悪銭の身に着くことは無へと云ふ壁への如く一文無し彼と一
 處に家業と爲ては成らないと役者仲間に見捨られ仕方の無さに出羽奥洲越後路までも廻はつて
 見たが何處の芝居も皆不當誰も拵つて呉手の無へのは皆な悪いことの應報だと曉つて見れば自
 分ながら怖ろしく成つて来たのら此度はメツパリ改心して東京に歸つて堅氣の商賣でも仕様と
 車にも乗ねへで夜々日に次で一時も早くと思ひ立て此原に通掛つて計らずも人聲するは何事
 と大樹の蔭に隠れて居て様子と見ると女に似氣ねへ人殺し雲間と漏る月光りですのしして見れば
 五年跡に別れた静岡の本通り塗物問屋のお静さん如何して此様を悪業に成つたの嗚呼僅のら
 ちに悪い人み成たのも元々吾儕のら起つた事と思ひ廻せば面目あい情願今のら改心して疊の上
 で死様に吾儕と一所に此處と逃のび俱に堅氣に消光らうのら悪い様には爲ないゆへ以前の事の水
 に流して何卒吾儕の言ふ事と聞てお呉れと最前より尾上菊蔭が慚悔話と聽き居たる静は何に
 も云はず差俯向て居りましたが此落着りは次回演し上ま

「落ちばて、袖に涙のうゝるとさ人の情の奥を知らるゝ」と云ふ古い歌が御座います。が實に人の性、善なりと申して如何様に悪いことに染りましても必らず其終りと遠きとする時には善に翻りうまする。で尾上菊壽は計らずも五年ぶりにて静に八王子の日野原にて迎ひまして横濱野毛の花咲町に世帯と持ち夫婦と成つて消光して居りました。が尾上菊壽は不斗爲た事が元因と成り重き枕に打伏まして日に増し衰弱へて急に快癒る形跡も御座いませぬ。家主「如何だ、病氣は昨晩も見舞はうと思ふたが何や蚊で紛雜して居て來るうつたが今日は少しは快氣のへ。婆々「ハイ、私の最う子旦那貴郎のお宅へ參堂らうと思ひましたヨ。ママお上り成すつて。家主「どうせ病人の見舞に來たのだのら上るお婆さん御免ヨ。婆「旦那様大きに快氣盤梅で御座いますとて昨夜は貴郎菊壽さんが子切齒と致しましヨ。私と呼びますのら何だへ〜と謂まると私の顔と堅乎と見まして静見へ無様だが如何爲たと云ひますから貴郎に命令つた通りお静さんの假聲と使つてアイヨ〜ト云つて見たが中々承諾させぬのら少々買物が有つて出たのら今に歸へると申したら夜中買物に行く奴が有るもの正眞の事と云つて呉ると謂はれまして子昨夜は宜い加減に

購着て置ました。が如何も聽ませぬのら貴郎の正眞の事と仰しやつて下さいまし。大家「左様の其れじやア熱が取れたと見へる吾儕が行つて話と仕様ナニ茶と入れる朝早うら茶と入れるなんぞと病人の世話と厨下のこと一處では中々掛まらねへ掛はねへが宜いと奥へ通り。大家「如何だ菊壽〜、オ、大層快氣ナオ、血色が宜い案じたが大分宜いが三十一やそこらで病氣に死ては不可へせ。斯ふやつて看病するも早く壯健に爲たい計りだ堅乎爲ナ〜。ナニ禮と云ひてへ止せ〜。病人の甚木義だ。ナニ起きて話と爲てへ左様のオ、いれ婆さん氣毒だがお前は平生病人の取扱ひをして熟練して居るから茲へ來て病人と起して遣つてお呉れ……寄掛りなく病人は頭が重いのらナニ前に出て話と爲てへ宜醫梅だア堅乎爲る今の處は大切だのら。菊「ハイ旦那様ア、定めて種々どお世話で御座りませう有難う存知ます中々是れが通例のお禮位いて此御返禮が出来るものでは御座いませぬ。定めてア、店賃も滞こはつて居りませう。家主「これ〜左様店賃の事まで思はなくつても宜い。チャンと家作人の方へは我儕の方のら立替へて渡して在る斯やつて病病て居んだもの又全癒た上の事其様な事と心配なさんか。菊「有難う存じます。横濱へ參りました。てのらも早や二年越御厄介に成りまして世帯と持ちました時のら朋友などもお前宜處の長家と

借りた何ぞの際は氣丈夫だんと思ふが云つて呉れまして私も喜んで居りましたに計らする
 此度の病氣種々御厄介な成りました上長い間の此御世話私は兼て居て稼げないの内に錢と
 ては御座いませぬ其お情も願ひます此様事と申し上げましては濟ませぬが昨夜もお静に居るの
 ら雪隠にでも行つたのとお婆さんに聞きまして一寸と買物が有つて出たと仰しやるのらウ
 ン(思切する)夜中に買物は心に承諾させぬのら根はり葉はり聞きましてが如何も怪しい事
 ばり今に歸つて來ませぬが大方吾が病病て居りませぬのら愛想が盡きて元が浮氣の女もへ情人
 でも拵らへて逃て仕舞たにト(せき込で咳とする)ア一忍入ります(貴郎に斯んな事と申し上げ
 て)濟ませぬが元は浮氣で贈増合つた中だのら好果な事御座いませぬが今さら逃げた跡では
 仕方が御座いませぬのら勘弁と致します敵手の名前と吾の耳に入れて呉るさい如何な處に
 居やうとも必とふん投まへて此恥辱は返します私は口惜う御座りますト泣出した其体に 家主
 菊壽の前は未だ熱に浮されて居るの幾等貴様の香の蔭にあり日向になり面倒と見て遣るのらと
 云つて少しは遠慮と爲て呉ねへぢやア困る吾も物持の大家と違ひ貧亡人の家主だから左様何ま
 でも拵ら事は出來ねへ其様處に氣は附ずに喉の森通と爲て捨て遣たのと自分の身引くらへ

て能く其様な事が云はれるお静は和郎の病氣と全瘡たさに仙境樓に身と賣つて眼機と云ふ始末
 成つた 菊「アエー(驚愕)ヘエナ、ナンと仰しやります静は娼妓に彼の吾儕の病氣と平癒た
 さに 家主「然る通例の醫者では否ないと中村様と云ふ御名醫の國手様に於て診察と爲て貰う
 と云ふとはは大分重ひ病性だ通例の藥では行ぬ故へ高金の藥劑と飲みなければ全快は望まぬ
 と仰しやるのら其價も三十圓程右のら左りと云ふては出來ず途方に暮て居た處中村様も可憐
 だ何様か爲て見やうと仰しやつてれ歸りに成つたが是話して聞て居たお静は泪と爲めて云ふの
 には所詮三十圓と云ふれ金と調達へるには容易の事で無いと云ふと打捨置かば一命にのゝわる
 處何卒妾の身と賣らして降さい縁在つて尾上菊壽と夫婦に成りましたもの夫に盡すの婦の義務
 殊には毎日の生計にも困つて旦那の御厄介に成つて居ります事故何程にも成りますまいが少
 れ金は出來ませうのら何卒此身と賣つて夫の病氣と快癒て遣うと御座いますのら旦那様が受
 人に成つて判と挿してお呉ん成さいと云ふから成る程うりやア宜心掛だそれじやア菊壽に知ら
 れぬ間に左様するが宜跡で病氣が全快つたら是々の次第にて身と沈めた事と話を爲て身賣の出
 來様に取計らうからとね静も承知し運携つて仙境樓の内証に行つて話と爲と百圓貸らうと云ふ

たのを身受の時の便宜にと七十圓丈借て来て僅かなれども十圓は中村様の御禮に爲て三十圓は藥劑の代價跡の三十圓と云ふものは今迄の義理の悪るい借と拂い又た静の身跡と引跡は宅の會計方に當やうとお婆さんと和郎の看病人に頼んで毎日の諸入費は明細に書て在るに静にも此話と聞せたら大きに安堵し後の事の心配爲ないとお静が出て行くときお婆さんい前に頼んだ事と話して聞せてやるが、婆「正真に恨んじやア濟ないヨ罰の當りますヨお静さんが仙境樓へ行きなざる時路次の入口まで行つては戻つて來又行くのと思ふと戻つて來て何分後と頼み申します責て三日でも看病爲て行き度けれどそうは勤の身だのら出來ませぬのら情願お婆さんヨり便りに爲て居るのらと仰しやつてテ又行つては戻つて來てのお頼み其れ程までに思ふて居ると恨んじやア濟ませんヨ家主「和郎が病氣が快癒つたら内証に行つて話してお静に合せてやる女房と恨む處の有難いと掌と併せて拜んで居るが能い而して全癒つたらお静の身受と爲る工風が第一ばんたせト最前よりの家主が有葉有枝と委しく聞いた尾上菊壽は重い頭と擦げまして菊何卒勘忍爲て来呉あさい〜ア成程仰やる通り自分の身に引比べて人と疑がふと仰しやつたが實にひしと胸に當りまると此な見る蔭も無い役者でも其爲る職掌は世の中の勘善懲惡と分けて

見せる早學問其とそれには引へて後家や娘と勾誘て終末の果は手切足切と取たのも數知れず彼のお静も元は駿州静岡の本通り遠州屋と云ふ大家の娘吾儕は其他の寺町の小川座に出勤て居た時誘携しました女今は慚悔に打明て話して致しませが彼の静と俱に逃延て東海道兵庫の宿の清水屋と云ふ旅宿屋に止宿た晩に悪心起しお静の寢入しを見届けてうつと抜出金銀は素より着類とも引渡へて逃轉るし話々方々と彷徨ひ歩きまされたが又斗らずも五年目に選迎ひ口車にのけて夫婦に成り其れより能く考がへ見れば實に未來が怖るしく思いついて其頃より不殘悪い心と捨て東京へ出て堅氣の商賣致さふと思ふに甲斐ない此罹病御世話に成つて居りますか嗚呼私も斯の様に四肢の悪く成りましたも今まで大勢の人と惱ました應報で御座いますア、悪い事と致しましたと今迄の事とば慚悔と致し其れよりうつく〜と致しても神經の狂いのら人と惱ました事と口ばしつて居りましたが穴教し事ば省略まして申上ませぬが萌毒の病氣は次第に重りまして三十一歳と一期として黄泉旅路へ赴きましたもへ家主始め婆さんも折角の心盡くしの届きませぬので大きに嘆き合しましたがさて有るべき事で御座ませぬが早速仙境樓の賑はたの静の許へ知らせて遣りましたのら早速のけ附け一目見るより静の悲嘆遣るのら無く漸々傍の



ものに願はれ方式の如くに葬送の式も済ませまして其れより七日の寺参りには必ず静は
暇と貰ひて婆さんに供と爲せ太田の東福寺と申す俗に赤門と稱へます寺院に参参りと致しまし
た今日しも丁度百ヶ日に當りますのらいつもの婆さんが華と手桶に入れ持ちまして静と供に
菊壽を埋葬致した墓地向と狭い石段と登ぼつて参りますと上より降る一連に先立て来る
一人の男年齢の頃は二十歳の二十一位の氣の利た傳法川の凄味の有る男残の二人は朋友に致し
ては少し言葉使ひが丁寧すぎる様子熊「假兄一寸下から登つて來的と御覽筈棒に美しい女だねへ
吉「静の爲ねへく」助「騒々」と云譯では無へが熊の野郎が餘り大きな聲と爲ますのら……
アレ假兄の顔と頻り見て居ます吉「静の仕ねへ人のとなぞ風聴しねへでト下から登つて
来る女と見せして吉「成る程別嬪だナ熊「其れに婆アが附てサ吉「餘計な事と言ふなト黙むれる
のら降つて参る此地は婆さんがお静の供と爲て婆「私が附て居りますのら捕はないでお上りな
るいさしヨ熊「エ、私等此地へ寄て居ますのら捕はずト静「御免下さいまし助「お婆さんもれ
上り成さいと云つた處で私の宅ぢやアねへ姉さんお上りなさいナニ足でも踏とらへ何に少し位
足と踏れたつて此様平常足の内へ歸ると幾等も有るのら吉「どうぞ寄つて居りますのら捕はず

お通りなすつてサアく行かうト後と振向熊「それ假兄だつて振返つて見て居るぢやア無への
助「ヤア……騒々しいと制しまして降りました此方は登つて振のへり婆「姉さん静「アイ婆
さんの降て行た三人連の中居た若いた方の御覽の此間死な親方に寫真しぢやア爲いねね和女
の前で云ふと悪いけれども菊壽さんは俳優女色が生白くつて何處の弱氣で居たが彼の人はずつ
かりと爲た苦んばしつて色は淺黒くつて年齢の十も若くつて傳法川で通釋でござうも申分の無
い餘程美しい男だねへ静「れ前の云ふ通り死な親方から見ると何處がすつかりとして宜ねへ婆「オ
ヤ、く話に實の入つて手桶と何處のへ置て來て仕舞たオ、彼處に有るハア唾と飲込うと思ふて
今少しで入齒と一處に飲込處だと惚けなのら墓前に至りばんやりと現に参詣と致して野毛の花
咲町に立寄點燈頃高島町の仙境樓に歸りましたが其より賤はたのお静は巖きに東福寺の石段で
見染ました其男の顔が目の前ふ散ついて忘れませんでしたか某日一月斗り經過まして賤はたの
我部屋と出て外の客人の處へ行かうと廊下へ二歩三歩行を過ぎますと此方の一間で賤機々々
「名とば呼は何事やらんのと聴耳と立て障子をして身と寄せて聞ども知らず座敷の内では
「オ、熊公手前一人では不可へのら益と廻しつてサ始めて此場所へ來やア爲めいし熊「はいく

か前痔我慢と云ふぢやアねーの三圓と云ふ金と持た事はねへ吾等が平生は神奈川の程ヶ谷何ぞで遊んで居るに大業に此仙境樓に登樓たつて其るに意張ナへ皆ナ吉松假兄の散財だ此れと云ふのも今も云ふ假はたと云ふ花魁はさうの探ねる其人に。それ助も知つてゐる通り過日太田の赤門の石段で見掛た別嬪ヨ助「さうさう〜美しい女だつたナア熊一マア黙言で聞け其女に吉松假兄がぞつこん戀慕て彼の女の所在と探し當たなら貴様等に騙らうと假兄の云つたと故お例令洋妾が藝妓が娼妓が娘ッ子でも廣くも無へ此濱だのら何様か探索出してへと思つて先似てると云ふから此亭の花魁の假はたと云ふのふ遇てへと思つて登樓て見たけれどさう出抜けにも首へねへから此杯遣つての上のとたマア彌太ッペイ盃と廻はさうのら聞て呉る其石段ですり違つた時めんまり助の奴は睡いだから假兄には静らふ爲ると叱られたが摩違つた時麝香猫が通つた様な宜香ひだつた助「熊公手前の顔とじろ〜見て居たせ熊」彼の女がの助「何に婆アがサ 熊一 戯談云ふなへたが先の別嬪が假兄の顔と見て居たせ其答サ此濱で美男子も多く有るが伊豆の吉松假兄程美男は餘り無へそれお當時名弘だのらチト談話中場へ若衆が「へい御免下さい此の假はたさんこのら此池さんへた遣ひ物で御座い升と大壺と撥込で参りましたのら皆々合點行かす熊」ナニ假はた北

りやア座敷が違つて居りやア爲ねへの私等は賃ふ機なとの御座いませんがアレ最う置て行つた熊「ナニ違つてもおまわねへ引摺込で喰て仕まへ若し違つて居たら汝の方の鹿粗と云やア宜り其でもたつて返して呉れると云ふたら雪隠まで行つて呉れると遣つて置けと騒ぎ居りましたの暫くたつて御樓の二枚目の花魁で假機と名稱て座敷も通りましてお近所に成り度と云ふ花魁と顔見合せた熊助兩人「オ、貴婦は過日太田の赤門でね目に懸つた姉さんでと此より酒宴と致し假機より書簡とば伊豆の吉松の許へ届けまると吉松は聞て喜び娼妓あら御面白いと云ふので假子と引連て仙境樓に登樓り初會のら訂らすも自分の姉とは露知らず實姉のれ静と夫婦の契約と致しますと云ふ情話は次回ゆるりと演し上げませう

第七回

「引續まして一席うかがひます」靜岡土産伊豆の吉松の情話で往來も繁き東海道戸塚の驛の立場茶屋に年の頃二十歳の上と一ツ二ツ出ましたと云ふ士族体の扮装で人品の良し書生風の男が開明たる聖世とは云ひながら車夫を相手に一杯上つて居りませう「車夫遠慮無く飲むの宜い酒が惡るゝつて如何も不可ぬナ此邊の酒は氷の様な悪い酒で一向飲めぬが調子と換て勝手に飲だ

が宜い 車夫「旦那さま有難う御座いますとどうも今迄お客さまにも大へことお供と致しました
旦那さまの如き方は無へどうも見掛ねーで其れで私が急いで曳て来ると立場くでは休んで行
け其様ナに稼へで曳ねへで宜しいと仰しやるし今日の様な良い旦那様と乗た事は無へどう急が
ねへでも行ける處まで行けと仰しやつて其れに私も戸部に客待ちと爲て居りました所へ車賃と
決ねへで旦那の方のら行く處まで遣へと云つて乗つたお客の始て、御座やと旦那さま一体何處
等まで入らつしやります 書「僕の僕は熱海で湯治と致ろうと思ふての旅だが別に急ぐ旅行では
無のら何處までなり行のれる處まで行つて貰いたい 車夫「へ熱海へ湯治に入つしやるつて左
様で御座ります其れはそうと未だ先の山手の方は車が通行路が出来ましねへが今少し経過ば
人力車が通行様に成るううでそが未だ然云ふ譯には行かせぬが併し早川村あたり迄御伴隨と
致して参りたる存じ升書「マア從容して飲で呉れ今夜は大磯までは参り度が如何も大磯の粗悪
旅宿屋ばかりで致し方が無いから藤澤が宜のらう 車夫「だが旦那様まだ早いのら藤澤よりの大
磯までは参れますせ 書「如何にも早いのら参いれやうが今も云ふ通り大磯はどうも宿泊らうと
云ふ旅宿舎の無いのら藤澤と爲やう手前には明日も乗車て遣るのら 車「有難う存じます切口も

何卒お伴隨致し度御座りますナア酒も飲誠にどうも有難い 書「併し酔て仕舞ちやア不可いヨ其
處に寐て仕舞れて困るヨ 車「宜敷う御座いますと幾等酔たつて大丈夫で頼棒に手と掛まえた日
には日に百里でも歩けやす 書「其れは宜が唯車夫々々と申して居ては勝手が悪い何との姓名が
有たらう名前と聞て置たいナ 車「ハイ私しは鐵藏と申します鐵藏のら腕車が早やいと云ふ譯
でオイ彼れは鐵道だつけ 書「洒落と言ふハ、ハ、ハ、(笑)僕は今晚藤澤に参つて娼妓と聘で愉快
と致し度 車「貴郎さま好色だだ併し私等だつて此様ナ車輓と渡世で稼いで居すが若年時分の
ら女と酒に浪費て仕舞ました御尤様で旦那様などは働いて娼妓買成たり酒と飲では無へ御畜
財なすつて成さる事で當然へで御座ります先藤澤では丸屋あたりが宜敷彼座いますナ書「イヤ
遊女屋へ直ぐにまいつては快樂の薄すくつて不可い酒が美味無いのらねがはくは揚屋とまう
するところへ遊女とよんで貰ひ遊ばうと思ふが 車夫「ナールはどしてねこであらばつしやるの
だナ近邊でワン／＼と騒く客が居あけりやア面白う御座いますせう其れじやア青柳精也様が宜敷
御座いますせう彼處で不可ければ良い旅宿舎は御座いますせぬそら彼の江之島の辨天様の鳥居前に
書「彼處は僕も宿泊ついで中々堅い家だのら却つて聞かぬナ 鐵「旦那様宜い宅が御座ります去

年の春開店と致した中宿の静の屋と云ふ旅宿へお供と致ませう其りやア良宅で御座いますせ書
 「僕は度々通行がサツパリ知なつたが何時開店と致した鉄「何時ッてハ、開店と申しますワ書
 「イヤ何時開店と致したと云ふのサ鉄「ハ、開店ですの去年の春致しました普請の立派斗
 りでは無て夜具海圓杯は新しくつて器物が宜くつて家内の女中衆ハ氣利て居まして女主人で御
 座います美艶女のですせ書「ナニ女主人だ鉄「好色だな旦那様だ幾等美艶的にお本婦さんは買
 入れませぬヨ官員様だつて其りやア不可だ其處は女主人の名義でも内々は藤澤在の淺場村ら
 處の金山大六と云ふ大盡様のね妾で御座ります其金山の旦那様は横濱へ斗り商法の事で行
 られるのら度々御殿負に成りますの良旦那様で御座り升其金山の旦那様が横濱に居て遊び
 成された際高島町の仙境樓の賑はたと云ふ花魁で御座りますうなが其とは大へ金で身受爲て
 内へ入へーと思ふたがお妾君が大層嫉妬で入れる事は不可ねハッとして如何爲ても入れへ
 ら藤澤の宿に置が良つと云ふて店と開いて揚屋と爲て居るが流行なんの大きいものだれ本婦が苦
 勞して居た身柄で御座りますのら私等の様な者が行つても飯と食て行け酒と呑手拭草鞋と必附
 けて下さるもんだで仲間等のお客と案内行ねへぢやアならねハッして仲間等が連れて行きやすべ

「何んでも度々参りまどが其お本婦と見た手りでも宜しう御座りますてト最前より車夫の話に
 何の心に合點まして書「ハ、ア左様の酒の止仕舞早く行のう鉄「何だ從容爲へ云て居てれ
 本婦が美艶的と云たら直に参らう、て好色家ナ旦那様だ酒は充分で御座りますから参りやすべ
 エト車夫は仕度と致す其間に此處の勘定と致し申し脚車に乗まして藤澤宿へ赴きました道中
 では別段話は御座ませぬ急ぎまして漸々日の高いのに藤澤宿の静の屋に當着ました若者「御
 來車申し鉄「旦那様其ぢやア暇と致します書「待て、纏頭と呉る明日また乗て退るが是は
 はんの酒代だ鉄「どうも、恐入ります立場、で御馳走に成りまして又酒料と頂戴ては濟ま
 しねへ有難う存します又明日早く参りますの何卒旦那様と注意て上げて呉れ書「アノお前酒
 お酔て居るやうだが飯でも食て行のぬのナニ最う充分だ其れぢやア明朝來て呉れト車夫と返し
 まして案内につれて座敷に通る風呂に這入まして酒下物と命じ下婢に纏頭と取らせ是れは帳掛
 へと云ふので幾等か包みて茶料と出します暫らく過と此内の女主人は仕度と爲て座敷に出で女主人
 「御免遊ばしませ只今は多分の茶料と頂戴しまして有難うぞんじます何分行届させぬで萬事
 御不自由で御座りませうが下婢に何より御せつけと願ひませ書「ハ、テ前はさう見た様お

女主「ハイ妾も先程の左様に存知ましたが。オ、昨年箱根の湯本にて大勢の車夫に取まの
れまして難澁致しました處貴郎が通行のりり成ましましてお助け下さりました且那樣書「左様
〳其際は一面識致した斗りで程なくお別れ申したはは不思議な處で再會致したナ 女主「其
際は且那樣の御深切と宅へ歸つてお話致しました處ナせお處や御姓名をお聴申して置なりのつた
と大層叱られましたたが後の察り去りながら彼際の御恩は片時も忘れませぬ今夜の丁度且那も參
つて居りますれば是れに出まして御挨拶と致させます 書「其れでは僕が迷惑と致す彼ははんの
行合て心配致した譯で無いのらうれでは困る其よりは最前詔らへた酒肴とば早速是へ出して下
さい 女主「ハイ暫らくお待と願ひますト出て行きましたたが引のへに羽織と着まして彼是六十に
手が届きしと云ふ人品良の善い親爺「御免遊ばしませ手前は當家の女主靜が後見人金山大六と
申します者以後は御別懇に願ひ度存じます 書「只今女主に承わつた後見人左様の以來は度々
御世話に成ります 大「誠に今晚は宜ころね宿泊下さりまして有難う存じますさて靜との先年箱
根に湯治の際湯本まで参りました時人足どもに悪く車を進められましたして困難の折のら貴郎様が
御通行のりり成りたに薩と持まして助のりまして宿へ立歸りました其かり御姓名等は承知致

て居るのと尋ねましたれば混雜に取紛れ遂に聞もらせしとの事にて叱つて見ても六日の當浦跡
〳の事であれ所在も知れませぬ故へ御禮にも申出でませぬ其際は誠に有難うぞん知ました其御
禮がでら一献差上度下座敷に少々手配と致しましたれば何卒お出と願ひ度只今其故に老人罷越
して御座ればどうぞ運びと願ひます 書「其れで却つて迷惑致しませぬの些細の事に御禮
なぞ申し受る事は本意ならぬと折角の御厚意行なは却つて失敬なれば御案内と願ひ升 大「サ
ア〳はんの有合せたもの斗のりり料理は誠に下手で有りませぬが其處が田舎料理の事眞平御免
下さいと言語と低く禮と厚く致しまして與りましたる静逸なる座敷に参りましておくれ〳
に主人は下邊に座と占客人と上座に招じまして静も其處に座と占め各々膳部と供へ下婢ども
まで出て参り響應がてら四方八方の談話に時と移りました後盤石と取出しまして金山と敵手に
致し甚だ終ると談話と致し彼是十一時の十二時にも成ます時分まで一話に致して居りました
たが書生「餘程酷旨致した御内儀にも御老人にも甚だ失禮で御座るが何卒〳是にて御納盃と
願ひたい 大六「まだ宜敷御座いませぬぞ御從容と飲り成すつて且那樣先刻のら遠い失念致
して居りましたが貴郎様は横濱の幸町と承のりしたたが御姓名と承知致し度ぞんじます 書生



誠まことに僕わがも談話だんわに身みのいつて姓名せいめいも申まを上げませぬで失敬しつげいでした僕わがの天城市郎あまぎしやうと申まをして目下めげ通辨學つうべんがくと勉強中べんきやうちゆうで御座ございますと。大六だいろく「左様さやうで御座ございますのどうの明日あしたも最さいう一日いちにち御逗留ごとどりのりと願ねがい度たくま左ひだりそれば本ほんの淺塲村あさばやむらに御同道ごどう致いたして田舎いんがの珍めづらしき所ところと御覽ごらんに入いります。アは命いのちせに隨したががひまして今晚こんばんは御納盃ごのはい致いたします何なにれ明日あしたは園基のこのの残りのこりの敵手あいてと致いたさせう併ひかしお静しずまだ先生せんせいは一口位いっぴやくゝゐは召上めしあがり為なさらうのら下物さかものと取換酒とりかへと温あためていま一献いっけん進申すすめせ先生せんせい御免遊ごめんあそばせト自分おのれが部屋へやへ立歸たちかへりました静しず「鍋なべや旦那様だんなさまに氣きと注つけてお上あがヨ今いまに直なに参まゐりますらと云いふて宜よろのへト四方よなたと見廻みまわし静しず「吉松きちまつさん 吉きち「静しずア好果こうくわ行いつたナ 静しず「好果こうくわ行いつたつて今更いまさら改かへためて云いふ程ほどの事は無な常然じやうぜんサ 吉きち「和女わにょが身受みうけとされて仕舞しまつてうら吾われ益えき鎗やう濱はまに殘のこつて居いたがどうの宜よろい鹽梅しんばいにと暫しばらく來こあつて居いたが急いそぎ郵書ゆうしよ遇あはなければ成ならねへ事が有あるのら至急しそく來こいと云いふ報知しらせが着つたのら此こ様さま士族しぞくの行装なりで書生しよせいと化ばて急いそいで横濱よこはまと出立だつた處途中ところちゆうぢゆうで乗のた車屋くるまやは此地このちの宅うちの事ことと委曲くわいじく知しつて居いる者もので立場たてばに休やすんで様子ようすと聞きくと金山かみやま大六だいろくに云い々と話わと為なるのら何なにのにつけて來こて善よいやら惡わるいやられ前に様子ようすと聞きねへちやア安心あんしん多おほらねへと這入はいり込こんで見みりやア案あんじるより生なまが安やすくはい此こ様さま餘計よけいの事は捨すてて置おて如何いかう云いふ急いそな話わが在あるだ 静しず「吉松きちまつさん一寸耳いちすんじと貸かてお

呉ゑれヨ 吉きち「フンフンフンフンちやア何なにの和女わにょが此處このちにゐるののは本宅ほんたくの本妻このいが面倒めんどういまりて本宅ほんたくへ這入はいり込こんで思おもふ様に仕事しごとが出來こねへら大六だいろくか進すすめると僥倖ざいせいに本宅ほんたくに這入はいりこんで婆ばアと己おれに殺ころして呉ゑると云いふのの 静しず「何なにだね大六だいろくと為なる……と四方よなたに注意ちゆういけ 静しずのに仕して呉ゑよ(低聲ひせいにて)而そうして寧なに由よしたら大六だいろくも殺害ころしがいに為なる金山宅かみやまと貴郎たかひと妾めかけで横領わうりやう為ないた了しやう簡かんサ兩人ふたりと殺ころしやア唯ただ十歳じふさいに成なる男おとこの兒こが有あるの彼かれと可愛かわいがつて育そだてれば安心あんしんなものだワテ何なにしろ親類しんるいが多おほくのつて今いまと云いふ譯わけには行いきは為ならないヨマ、從容じゆうじやう為な話わは是こゝト大指おほいさにて知しらせる(寢ねしつけてのら來こて話わそうのら其積つみりて待まちて居いてお呉ゑちやア不可いないヨ 吉きち「其そのりやア待まちつて居いるが行いたきりで來こなくつちやア不可いないせ 静しず「何なにだ子仙こせん境樓きやうろうの二階にだと思おもつちやアいけなニせ 吉きち「爺やいの方かたへ行いつて寂さびして仕舞しまちやアいけねニ、ちやア待まちて居いるせ 静しず「アイ宜よろヨト前後ぜんごと見廻みまわして大六だいろくの部屋へやへ参まゐりましたが今宵こんや伊豆いずの吉松きちまつが天城市郎あまぎしやうと變名へんめい致いたした静しずの許もとへ這入はいり込こましたがさて如何いか様さまナ密談みつだんと致いたしますこの次回こゝろまでお預あづかりに致いたします

第八回

「樂たのしみは夕顏ゆげん柵さくの下涼したすくみ男おとこはては女めは二布ふたして」ト誰たれやらの歌うたれました古い歌ふるいうたが御座ござますが

田舎人が集りまして愉快と極めまゐるは月待日待杯云ふ時に酒など飲合ます斗り其他は東京で申せば立橋酒店と云ふ様な店が御座いまして酒肴と商ひまするが茲は東海道藤澤宿の近在に淺橋村の村端れの酒店に村の衆と見へて大勢集つたりまして○「如何だへそ強勢に稼せがねへでも宜いんべニ金がのこるものでも無へし死んで逝くとき持つて行つたつて何んにも成んねへり舊時の人は死で逝と地極や極樂が有るら若し地極へ墮落たら其際は地極の沙汰も金次第といふだんべいの當今の天朝さまの聖世に成つては是も何んだの餘り譯つた話でも有めへら時々の休んで好きな酒でも澤山飲で健康ちうものを害さによつたらねへり△「アニ譯と無へ事な拳子と返り位ナ事ト搦拳と拵へて打真似とする○「アニ健康に成れつて事だリナ間違へては不可へ夫だらら從容と休息と思ふて金へ幾山程所持て居たつて駄目な話だ大へ聲ては云へ無へが己の村の金山大六様と云やア此近在で誰知ぬ者は無へ位ナ大盡だに其内へ盜賊が這入て大へ金と取れた上妻君が打殺されたつちうが其が檀那様が不在の内だと云ふと宅内中のものが縛られて金出せくちうのと平生吝嗇な妻君だら金は一文も出さねへちうて威張て居たら遂にお妻君斗りメクに斬れて仕舞た其晩の檀那様は藤澤宿の圓者のお静さんの

處に行つて居たどサア其騒動の報知に宅へ歸られたらうなが非常打驚愕て人々多く頼んで盜賊と察させたが夜中の事分らねへちうだ何だの未だに盜賊の行術が知れねへて云ふが餘り慾は欲もので無て此お妻君の様に打殺されちやア金が幾等有ても何にも成ねへ其はらうと此のお妻君の死であら雁の買つてたら藤澤のお妻お静さんだ彼の位にお大盡の直ぐお妻君に直つて仕舞たが彼の女は大層もので先妻の子の大助さんと自分の子の様に可愛がつてサ中々出来ねへこんだに人に寄ると今度のお妻君は人々馬鹿に爲て不可ねへなんと云ふが中々そんな事はねへてゐらい者だ彼の静さんは元は靜岡で立派な處の娘だと云ふ事だが幸福が悪くつてとらうく娼妓に成て横濱の高島町に出て居ると金山の旦那様に身受と爲れたので斯う云ふ在所へ来たんだが元が元だら長物もので和郎等行つて拜まねへる見るつちうものでは無へ拜むつちうものだ色の眞白な眉はゑらい(斯ふと手真似する)富士の山見た様な△「アソコ大きな聲して驚愕爲たせ○「齒なんぞと云ふものは己へ今迄賣るいものだと思ふつたに眞白でナ唇が眞赤で髪の色などは赤いものだと思ふたに眞黒で笑顔と笑ふと頬の處へ穴があく何て穴だと聞て見るとユウユウ縋つちうもんだつて其に第一に世事の宜つて彼の死だれ妻君なぞは小農の者なぞ行つたつ

てツンとして口も利ねへでピン／＼爲て居たに此度のお妻君は愛嬌ちうものが有て己の様なる
 のが行つてもマア此地へ入つしやい誠に行届させぬら萬事宜しく願ひますなんて丁寧な事
 茶と持て来るに茶壺ちうものに載せて御自分で持て来るだ己生産の茶壺ちうもので茶と出
 されたのは始めてだ四角なものなら片方から取て宜が圓形ものなら何處から取て宜の譯んね
 へうら間違／＼爲て居ると恥と搔せては悪いと思つて茶壺の儘下に置いて行つたが人に恥と搔せ
 ねへのは大層ものだらうして菓子など出して食わしてナ顔と拜みに行つた斗りでも澤
 山だ汝拜みに行け△其んなに世事の宜い○宜へてゐんて小農の者だつて馬鹿お
 爲ねへ大層ものだト村中のものが奇と觸るとお静の噂斗り致して其評判の宜しう御座います事
 大層もので静は斯云ふ様に村中の者と饗應て下々のものに善評判と爲せて置も自分の情人の
 吉松と此金山家と掌摺爲やうと云ふ心の底意實に恐ろしい外面如菩薩内心如夜刃と云ふ女で御
 座います或日の事夫金山大六は何の思ひ有氣とお静の部屋へ参り大六「お静や／＼静ハイ何ぞ
 御用で大六「誰も今日は居るいら一寸聞ねば成らぬ事が有が四五日跡の事お静が暇と呉れる
 横濱に行つて買物が仕度と云うら下婢をもと從て宿りがけに遣た其留主中に少々探物が在つて

彼處此處と尋ねて遂には和女の手箱又は單筒の中なぞ何心無く探した其時單筒の引出しに甲州
 金が多量事通入て居たが彼金は所持の通貨と取換て貰つたのう又は従前より所持居たの「静
 ハイ彼の甲州金で御座いますの彼れは旦那様自己の親の遺品で御座います大六「フン親御の遺
 品としてお静和女の親御と云ふは「ハイ檀那様のお世話で斯く出世致しましたのう隠さず
 話して致しますが元妾の先祖は徳川家へ仕へました武田氏で御座いますと御維新以來浪人致し
 ましたの妾の父に傳はりました遺品で家の寶と思ふて大切に致せ其方に譲のらと妾に下さつた
 ので御座りませ不幸に爲て娼妓にまで成下りましても肌身離さず所持て居りましたの貴郎の
 お世話に成ました日より心落付ちやんと單筒の引出しに仕舞て置さすのも皆檀那様のお庇蔭
 で御座います大六「ハテナ過般藤澤に送籍と仕度と話しと爲たればお前の云ふのに私は駿州靜
 岡の本通り或る商家の娘で父は今に繁昌爲て居るの母の繼母て在るのうら心にも無く家出と爲て
 親と捨た罰で此様に娼妓迄に零落ました故今更親に申譯なく何卒宅には仰しやり遣と下さりま
 せと泪ながらに云ふ故に親の處へは知せ無で取入れた話だの役所といつはる様で濟ないが漸々の
 事で役場で籍と調製へて其事は濟せたが其際は町人の娘今云ふ處と聽は御旗本の娘左様時々旧



が變つては困る何れが眞誠で有るのだへ靜「ハイ否其際はあくまでお話と致しませぬら御疑念も御座いませうが今更何にと隠しませう十五代の上様が府中へ御成の時妾の父はね隨伴と致し靜岡へ参り暫らく消光て居りましたが仔細有つて町人に成下りましたが只今以て父は繁昌致して居ります静岡に参つて御尋ね下されば譯ります静岡に何卒御疑念ひとお晴し成つて下さりませ 大六「併し左様親の所まで云ふ位ならば正哉間違ひは有まへがちつと此方に甲州イヤ疑念が暗たのら心配爲て呉るなト何の奥齒に挟まつたもの云ひ様どうも其から致して何のと氣お成りませす事で昨夜の別れに申上げました二世と契し伊豆の吉松に金山の先妻お民と殺させまして其際盗みし甲州金と兩人で割賦致しましたのとお靜が單筒に入置きましたので若し此の甲州金から致して事が發覺た日には成らぬと云ふので借筒と認め郵便にて横濱の吉松の許へ届けましたか金山大六は其儘二三日經過て從容と探索爲ても譯らうと云ふので打捨て置ましたか其翌日所用と達に藤澤宿まで供と連携て出行きましたは九月廿一日の事で用事と済し歸りがけ甲夜のうちは玉兎の無く暗闇で御座います静岡に歸宅らうと云ふので足早に淺塚村の土橋の此方へ参りました金山の宅では夫大六の歸りが遅いから誰の見に行かうと思もう慮

へ十歳になる大助がお靜の側へ参り大助「阿母さま〜」靜「何だね未だ寝ないのへ明日は學校が早いから早く寐ると云ふと不可ぬヨ誰ぞ彼の竹は居ない坊様と寝のしてお呉れ 大助「彼の阿父さまが歸宅の遅いから私誰の連れて向に行つて來ませうのト虫の知する子心に泪とこぼし案じ居ります其處へ息急と駈附て参りました一人の男「大變で御座ります〜」靜「何だね誠在の者は困るヨ大きな聲と爲て土足の儘座敷へ上つて何が大變だへ 男「何て今ア檀那さまのれ供と爲て淺塚土橋の竹藪の處まで來ると出抜私の持て居る提燈とハア〜〜〜長へ光るもので打落しましたのらハア〜〜〜提燈と引取りまして逃て参りましたが参りながら聞て居ると人に殺される覺へが無へものだと檀那様が仰しやつて居るうちワ〜と聲と出して人殺し〜とハア〜私と檀那様と兩人限りでは行けませぬへら村内のものに知せながら参りましたが御新造様貴婦直ぐお出なすつてハア〜〜〜靜「エ、ナニ其なら檀那様が殺されたとそれと仕度と爲る間遅しとお靜は淺塚村の入口の土橋まで來て見ますると早くも村内のものが大勢駈着けまして居る死骸に驚つて見ますると胴巻の金が紛失爲て居ます盗賊の行術は知れず最早呼吸は切て有にヨ、と聲と上げて泣叫び居ます處へ高山新左衛門と云ふ先妻の兄が駈着て参りましたの

と見てお静は「ア、叔父様へ、便お思ひますのは貴叔斗り何卒那極様の敵と打つてくださりませうぞ(泣)新「コレへ左様騒いで仕方がない私も今の騒動と聞き足も地に附かず途中等夢現で歩いて来たもつと提燈と死骸に街附けて見せて呉れる……(泣)如何したコレ大六殿とどうして此様死様と爲れた(泣)僅半年或一年経過の立ぬに夫婦が賊の爲に殺害れると云ふは如何なる悪禍の平常人と救助の事のみ願に懸て居た大六が此様死状と爲るとは何事だト泣叫びながら村内のものに向ひ新「何卒何様の心利たるものが藤澤分署に駈つけ届けて下され早く御檢使と受けて死骸と葬むるの責の追膳れ静和女の敵へ」と云はしやるのか署へ願へばお政府で敵は打て呉ださるのら氣と静めて何卒此後は大助の助力に成つて金山家と建賞はにやア成らぬのら氣と堅平持つて下さい静「イへへ、妾は旦那様に死別れ何樂も生て居られませう一所に死とう損知ます(泣)新「コレへ和女は老先の有る体だ其様事云ふては仕様のないマア、直に死骸とば御檢使と願つて葬つてのら後で如何でも話と爲るのらとお静と慰め彼れ是れ致して居ります中に御檢使が下りまして一通紙口とお關の未死骸は假埋葬に爲て置との御達しに泣く我家へ引取り方式の如く埋葬しましたが元費しき事は省略まして大六が一七日の

連夜の晩大勢親屬の方が集會りまして酒宴ながら相談最中兩方の目と泣騰しをしたらお静が座敷へ出來て静「御親屬の各位只今横濱の吉之助が見まして御座り升が新「オ、オ、和女の舎弟の吉之助さんが左様の直に通して呉れへ宜處猫やアない直に此地へ何卒直に通してナニ未だ主家に雇れ中だマア其でも便りに成るのら從容相談と爲たいのら旦那遠慮なくマ、此地へ吉「ハイ、エー掛違ひまして何方様にも御一面識とも致しませぬが御逝去の旦那様には度々横濱で御目に懸りましたが私はお静の弟吉之助と申しませぬ者を見識置のれまして御引立と願ひます新「コレへ、手前事は高山新右衛門と申しませぬ者當家の先妻お民の兄で御坐います以降はお見識置のれ御別懇に願ひ度い「エー甚だ申し遅れたが斯る御挨拶ぢやア解のらぬ奴と思召が有るは知らぬが(ケツッ)手前は北川藤六と申し(ケツッ)お心易く願ひます僕ハ隣村八幡の神官職大藤樂と申する者サア、此地へお進み爲さい格別に御懇意に願ひ度い併し皆是丈けの親屬が挨拶と爲る禮と受るに先方はお獨だから頭と下ては重くつて成まい酒と飲るが懇親に成たら宜のらう吉「ハイ何のら申し上て宜敷御座いますやら檀那様の御凶變のお書簡が参りました故驚愕致し直に駈附て参りましたが私は主人の用で神戸に参つて居りまして漸く

夜歸つて來ました處へ御書簡で取敢ずれば暇と主人に願ひまして新「ア、左様のナ此地のら大六が横死の書簡が届た故うして昨夜神戸のらか歸りて在たつて無事で其は宜盤梅だつた此頃は紀州沖は剣呑だと云ふ事だ船に乗のは注意無ければなりませぬ。其れはとうとを静は泣きつゝり居て旦那様と一つに死で行き度と云ふ又尼に成度と申して居か誠困るて吉「否、今時は老先の有ものが尼に成る様な野暮なもの御座いませぬ其よりは尼に成りませぬでも其積み成つて働いてお宅の繁昌と祈が亡檀那様への何より追膳と思ひまん新「左様ともく夫に附ては貴郎さんにも姉様に力と添へて此家と後見て彼見人同様に爲て貰ひ度うら俱く骨と折て金山の家と建たいと思ふのら情願大助と見て遣てくだされ吉「どう致しまして不肖の私殊に主人持で御座いますれば何れ主人此由とれ話申した上また如何様にも御盡力と致し度損知ます新「コレ座布團と持て來ねへ吉之助さんが足が痛リ吉「何ぞお摺り下さりますな新「マ、從容と相談仕やうのら後々の事と相談致し其より吉之助は親屬お稱譽され今日も明日も引止られましたが某日横濱に立歸りまして間も無く主人に暇と貰ひましたと歸り來まして是のら金山家に落付いて居ました但其れより四五週間斗り經過ますと離亭の一間にお静は吉之助と差向で一日

飲ながら吉「此鹽梅ぢやア大丈夫だナ静「とうさ大助さへ大切に爲て居りやア後々は如何も成るとぢやア無へのチト兩人は密く後々の事とはあしてとりました吉之助はつと氣が附き吉「誰だかさくするナたれの來やア仕ねいの鳥渡見る静「大丈夫だヨ人間は來氣支へは無いヨ大方犬でも這入たんだらうと障子と開て見ますると腰の邊のら穢れましたケツトと巻いて見るも凄氣の有さす車夫体の男が車「何の來たらうと仰しやるが私らは犬も同じ様な家業と致して居ります車屋で御座います旦那さま先達は御酒料と多分に頂戴まして有難う存知ます吉「ツイ見た事も無へ車屋人違へぢやア無へか車「人違へたと横濱で人に知れた伊豆の吉松假兄お前様の方で御存知が無へと云やア謂ねへぢやア成ねへしのも九月の下旬横濱の櫻木町でお前さんが藤澤在の淺場村まで急いで遣て呉ると云のら此宅の御門の處まで急に急いで遣つ附ました最う此處で宜と仰しやるから下しはしたかハテナ商人風の堅氣の分装と爲て居るが伊豆の吉松假兄の此宅に這入たは長賄博でも有ての事の、ぢやア歸りと待て乗て貰はうと其のら出這入に注意して聞て見りやア此宅の旦那が死去つて其七日の連夜だと云ふのら馬鹿々々しいとつぶやき乍ら車と曳て歸らうと目には附たは車の中に落して在た此紙入何ぞの種に成だらう

と思ふて裡と改めて見ると女の書た書簡が在る。ヨシに新造さん貴婦がお書あすつたのでせう。古い荷物が邪魔に成るのら早く方付て呉ると隠し言語で書て在のら何でも怪い事だわいと
思つたのら此邊に足と止め様子を探つて聞て見れば此家の旦那が殺されてまだ其斗りのお妻君
まで、へ、ン此奴が古い荷物と方付たと云のなるふね高價品ぢやア御座せん此手簡が這入て百
圓イユサ百圓と當と附て來たんだが御新造の顔と見た上ぢやア未だ百圓ぢやア不可へワ最う百
圓直の高りましたへ、ン御新造さんへ其方と向てすまして居るが私と御存知で御座やせう下
萬年町に居る時分甲州岩の隣に成つてサア少と吉松假兄の前では云悪いが其時岩の野郎に頼ま
れてお前さんの處へ往た野州のナヤラ熊と云ふ野郎で浮座へ升彼の時の犯人で居た野州熊で御
座います其後は八王子で待ともく硬は無く大方アノ岩の野郎も途中で殺害てお仕舞なすつた
らうチ目と着つて居たお静さん何と兩方で二百圓ぢやア安價もので浮座いませう何卒清うに出
して呉んあせへ「吉」お静此熊と云ふ人と知つて居るか「静」ハイ一運退た事の有ますヨ「吉」オイ
熊さんとやら二百圓呉ると云なら買も仕様が金と云ものは消費ば減もの二百圓で根つきり棄つ
切り二度と來ちやア不可へヨ「熊」其りやア大丈夫ですがお前さんの方が與やうが運々して居る

は度々來ますのら深いにね呉んなせへ左様されりやア悪い奴でも義理が有のら度々來られるも
のぢやアぬへ「吉」サア持て行けト吉松は二百圓の紙幣と票ひれず手箱の中より出して敷へもせ
ず目分屋で渡しますと此方は受取手拭に包んで庭と廻はつて表の方へ出て參りましたが此落着
は如何相成ますとの次回までお預りのりに致します

第九回

「引續きまして一席演し上ますは静岡土産伊豆の吉松の情話で前回は人力車夫の野州熊に悪事
と見現はされました二百圓の金と據なく伊豆の吉松井に女房お静が出して遣りましたが是と
ば持て歸りましたのと手始めと致し度々遣つて參りますのら二度に一度の断はりますと高聲と
揚て怒鳴ますのら詮方無く五圓七圓と其度々に持せて歸しましたが遂に是が露見の端緒と成
つては成らぬと或夜支度と致して兩人は金子と殘らず浚ひまして淺場村と逃亡致して仕舞まし
た翌朝に成まして朝飯と進めやうと下婢のお竹が起しに參りましたお兩人は居りませぬので驚
愕致し家内では大騒ぎで親類に知らせると程無く高山新右衛門は之と聞つけ參りましたがサア
大變と上と下への騒ぎで此由とは藤澤分署に早くも届けやうと書面を認めます其處へ何で耳に

這入ましたる神奈川縣の探偵吏と見へまして兩人が嚴然き分装にて金山の支關に參り 探「頼も
 うく 取次「ハイ何處のらか來臨て汚座います 探「エ手前共の神奈川縣より出張致した者て
 少々當家に尋ね度事が有て參つた案内と致して呉れ 取次「お姓名は何様と申しますの 探「ム名
 刺と只今渡すうら……サア是と持て參れ 取次「ハイ承知りましたと名刺をば高山新右衛門に見
 せませす一通用事と聞きますと探偵吏と云で客座敷に通して暫時して高山新右衛門「手前事は當家
 の親屬高山新右衛門ト申すすれ見識置まして 探「ア少々調訊んければ成ぬが事實と包す話で呉
 れんければ不可ぞ 新「新右衛門承知居る丈の事は何あり言上致します 探「ム何の昨夜當宅の後妻
 れ静と申するもの并に舍弟吉之助との申するものに大量の金圓と盜まれ逃亡されたとの事に付
 き役目だのら是に參つたが左様な不都合の在たの如何ぞ 新「ハイ隠すより現はるは無しとの大
 金が紛失致しましたに相違汚座いませぬ且兩人の逃亡の事共其趣と汚届け申します手續と致
 して居ります處早くもお政廳のね耳に入り恐入りまして汚座います 探「當家の後妻静は何處の
 ら嫁に參つた 新「ハイ是は素と横濱高島町の仙境樓に賤機と申して勤と致して居りました娼妓で
 汚座いまして亡大六が買取に相成まして其とは遂に身受して藤澤に旅宿舎と出さして其に通ひ

居ました處 秘妹お民と申しますものが當家の先妻で汚座まして之は賊難に遇まして殺されて
 仕舞ました。ハイ。其のら其跡に後妻に故無く呼迎のへましたので 探「フンく其邊は承知致し
 て居る其は宜が弟吉之助と申すものは何時參つた 新「ハイ儘の大六の一七日の連夜の晩に參り
 ました所が中々發明もので汚座いまして同人は大六には度々遇たと申しますから心置なく忤大
 助の後見にたつてと頼みまして全人も未だ奉公中に汚座いますのと先方の主人に暇と取せ當家
 に呼寄まして汚座いますので彼れ是れ一月半斗りに成りまるとるが大い盡力致升ので大勢の人も
 譽て居ります位な處で此度の事一向解ひぬ事だと思ひまして家内の者と調て居りましたら
 御出願が遅くなりまして恐入りませ 探「其吉之助と申そのの年齢及び面体格合は如何な質だ 新
 ハイ廿歳前後お見へませすが併成人擬て居ります事は居りました身の高い目の涼しい口元の尋
 常な色は淺黒いが先美麗男振りて汚座います背高のらと低く無く 甲「探「逃亡致して失踪の知れ
 ぬ伊豆の吉松では無いの知らぬテ 乙「探「吉之助と申して居る 新「ハイ御意に汚座います 甲「若
 し其奴の眉の脇に痣が有りやア爲なのつたの 新「ハイく是斗のりが瑕瑕だと私は存知ました
 探「其れは伊豆の吉松と申す奴でお静の高島町に竊て居たうちの問夫であつたシテ當金山へ

来たのは何の手續きと以て立入たの又朝夕斯ふ云ふ事が有たと思ひ當るとは無の新「ハイ私ハ
 餘り當りへ朝夕は立寄ませぬで別に證據ばし申し上くる事は座いませぬがハイ探「た静の使
 つて居る下婢は居るか下婢は新「ハイ菓子と石上つて下さりますの探「否々下女の居るの下女が
 新「ハイ下女で座いませぬと厨下の方で見送りまして新「アノ竹一寸来う〜ナンダ手繰とは
 づさねへの尻と端折て居すと裾と下せ〜此地へ来い探「剛い者では無い最つと前にもそつ
 と前にもそつと〜竹「よろつて呉れ〜何とよろるで新「何と云ふ御飯と間違ちやア不可此
 地へ来い竹「此邊で宜敷座やすの探「少しも剛い事は無のら前に進み竹と云ふの竹「ハイ左様
 で座ります探「静に和女使はれて居たの夜具蒲團の巻延し和女が役で有らう竹「へは
 新造さまの御用で座りませぬの探「静の寢床の上下しと和女を爲るの竹「床と敷ましたり敷ま
 そのと上下と申しますの探「ム、其と致すの竹「ハイ致します探「弟吉之助と姉の静と一所に
 寝て居た事が有たの同床と仕て居た事は無のつたの竹「枕と並べて寝て居た事は座いましね
 へ床と別々に敷ます探「吉之助も静も同じ座敷に寝るの竹「ハイ舍弟子とは新造さまとお
 座敷は一で座います探「フン俸大助も同じ座敷の竹「否々大助様は學校が遅く成と不可への

らと朝の世話と爲て遣らねへちやア成りませぬのら妾が側にお寝し申します探「大助は別に寝
 ろし奥の座敷に静と吉之助と同室に寝るのだナ若し床をぞ上る時に可怪い事有りはしあんな
 か竹「ハイ其も新造が竹々今起たのら床と上ると言はれにやア行た事は無へで座い升床に
 這入てい如何だの解らねへが二箇床と敷ますのら別々たんべ探「同寝と爲るに相違無の氣が
 のぬの竹「オ、旦那様〜申上げます同寝爲ました跡を見ました跡と探「それと話せ新「ハイ
 只今竹や有体に隠さず申し上る竹「ハイ過夜私鹽のらいものと食ましたの宵の内に湯茶と
 いろく吞ましたの夜中に雪隠に行き度つて堪らねへで雪隠へ行つたが如何平生と違います雪
 隠だと始めて氣が附いて見れば其善で癖はけましてお上の雪隠へ這入て仕舞た最う這入たもん
 だのら仕方が無へで其のら奥の間の傍と叱られちやア不可へと密つと來と話聲が聴へるのら立
 聞きと爲ましたら舍弟子と御新造さまと酒宴と爲て居ましたハテナ酒宴でも爲るのあらなせ妾
 に命令ねへと屈腰で聽て居るとも知らねへで好果行つたなアと舍弟子が云ひますと御新造さま
 が其様な話は度々爲るものぢやア無へ其よりは甲州金の事と旦那さまに尋問れた際は苦しのつ
 たとの又暫時すると古い荷物と方付たなんて其跡は聞取まし無へが多分其間に可笑話と爲て居

ました跡は扱へい何でも同業と爲て居た跡の話だ其で宜だ探「ム甲州金の事古い荷物と方付
 た何に致せ吉松の所業に相違無い彼の在所と尋ねて居たが斯云ふ處に隠れて居るとは思はあ
 つた其では此方等の目的に違ひ無い外に見聞爲た事は無いの竹「未だ御座いましたまた探「何
 だの云へ竹「外に有と申しますのは此間から人力屋の如き者が金の無心に來ますが十圓五圓
 三圓。と時々持せて遣りまどが可怪な事だと思ふて居りました探「ナニ車夫体の男が度々金の
 無心に來る甲探「フン其で兩人は蔭と隠したに違ひ無い其奴を引捕へ開べて見たら兩人の事實
 も了解で在らう其車夫に借財でも有なればまたしも何に致せ其車夫が參つたなら捕縛して置て
 直に藤澤分署へ訴へる左爲れば其者より調れば兩人の失踪も譯るらう話の未だ切ませぬうち
 に門口より男「は免成いヨお頼ん申します今日は頼申します竹「旦那様參りました聲が似
 て居ます新「併し間違ふと不可探「ナニ其車夫とやらが參つた恰度僥倖竹「だんある
 まいませぬ見て見ましたらふだん來る車夫にちがひ御座いませぬ探「さようならこれでは
 奥に吉之助さんが在だのらと奥へ連誘て這入と手早く捕縛の用意と致します竹「ハイ彼の奥
 へ通しますは宜敷座います何が卒妻は勘辨と爲すつて探「手前と縛つて何に致すの其れよ

りの怖縮致して悟らるる直に此方へ入よと差圖と致して襖の裡に隠れて居る其とは知ぬ野
 州熊「何卒お早く願ひます取次と竹「ハイお出なさりませぬ熊「イヤ姉さん御新造さんでも旦那様
 様でも宜のら一寸吾が來たと云ふてお呉れ竹「ハイ旦那様は奥に居りますのら何の手の放されぬへ
 仕事と爲て尻のら奥へ通つて呉ると左様申しました熊「今日は氣嫌の宜處へ來ましたな
 大層早く用の足りるいつも此様に早い事は無にと飛で火に入夏の虫今ぞ悪の報ひて捕はるゝと
 は知ませず熊「沙免爲さいとケツトと空關に放出して其儘次の間の襖と開ると最前より待構へた
 る探偵吏は用くと左右より静かに爲ると云ふのら野州熊と辨とた、さつて縛り上奥の間
 にて訊問しましたが中々の白刃者にて確然とも云ひませぬのら直に車と雇ひまして神奈川の縣廳
 へ拘引爲て參り警部が一通を調に成と漸くと昨晩まで演上げました通りと薄々は白狀致しま
 したが未判然と致しませぬのら何に致せ吉松と静の兩人と遠方へ逃しては成ぬと云ふので其々
 手配と爲て探索に出して野州熊は其儘監獄署に拘留致し置ましたが借一月より経過まして伊豆
 の吉松の箱根の木賃にて召捕れまして宮ヶ崎の監獄署に拘留れました此監獄署も其頃は舊時の
 弊が一變致しませぬ餘り大勢の人と一處に入置させぬ衛生上にも御注意厚く壹室の裡に僅の



管子
古松野
海
打殺
凡

田舎の
男

六七名斗りより入ませぬろうで閑話は差れさせまして吉松は日の暮る頃該署の第六番の室に入られましたが別に談話も爲とか出来ず誰の居りますやら譲りませぬで其夜は一睡の夢と過ぎ夜は明々と明ますると硝子障子に明光のさして互ひみ顔と見合せて一人の男「オ伊豆の吉松ぢやア無へる吉」ハイ彦厄介に成りに参りましたオ、鎌倉の假親源治兄ぢやア無へる源「能く来た云てへる舊時と違つて上下なし舊時なら立派に蒲團に包めて寝のす事が出来やうが今ぢやア御法度か變つた故其様な事も出来ねへ只ケツト一枚にくるまつて寐る斗り最う斯様決定が附て仕舞ぢやア悪い事は出来ねへぜ吉「如何にも假親の仰しやる通りだと側傍と見まして吉「オれ前はウシヤメン龜ぢやア無へる龜「ハイ假兄詰らねへ事で此様所に來て長く居ります源「そうして吉松れ前は如何して此様な處へ來んだ吉「エ多分此獄内へ這入て居やアがるだらうが野州熊と云ふ野郎の尻とわりやアがつて遂々此様な處へ來て仕舞たが何しろ二三日御厄介に成ります其より四方八方の話に其日も暮し明る未明の頃何やらん類に表が騒がしい様子に獄内の者も心ならず居りますうちにヤサン「くくくく其れ火事だと云ふので吉松は逸早く二階の窓より見ますると火の子は餘々として立昇り直に監獄の脇手で御座いますうら火事だくと怒鳴る

中火勢は益々烈しく成りまざるのら成規に依て獄中の罪人と殘らず室内より出しまして獄丁吏は右往左往に駆け廻り大聲に呼はるやう此火災に際り消防方に盡力爲たものには官へ訴へて本刑に一等と減じると役人衆は諸方々怒鳴て居る中にも犯人七八名は脱監と企てますものが在り吉松も其脱監方へ盡力と致して右側に在る賄い部屋へ飛込天秤棒と引提まして消防に盡力爲るやうに見せて此混雜に紛れまして裏手の方と打破り程ヶ谷の方へ逃て参りますとハヤと人に衝當りました吉松は一目見るより此野郎監中と破つて出やアがつたなど怒鳴れまして先の男は振返つて見て驚愕「オ、吉松假兄ぢやアねへる吉「何に假兄も無へるのだ汝のお尻陰で事が露見た此野郎思ひ知れと天秤棒と以て野州熊と滅多打に打ますと脆も思ひ絶て仕舞其儘其處に倒たますのを見向も致さず莞爾と笑ひ心地善げに彼方と見遣り吉「オ、大分赤猫が大きく成たと天秤棒と其處に捨て山越しと致して逃ましたが此落着は次回演上げます

第拾回

「御伽師襟に掛けたる人形箱佛出らうと鬼と出らうと」と申す古歌が座い升が成程彼我人間と違つて下すつた遺物主の心では皆んな善い者ばかりに爲たい思召でござい升ふが又其處には

機略と申して吾々が一生と安樂に暮らさうと爲ての種々百端の工夫魂膽で金と儲ける事に算段と
 用いますと同様に矢張造物主のお心にも深妙なる算段が有遊ばして悪人も此世界に造る
 さつたので言はゞ悪人と道具や龜鑑と致しまして人間の見せめと成されたので成程是は感
 服する譯で兎角人間には怠りと云ふものが有まそ者で座いますから若も他人の振見て吾振直せ
 と申す事が侈座いませんでしたら皆な仕度放題で惰弱に成て殘らず悪人になりますから其處で
 造化の配劑で悪人と豫め造つて善人の見せめに成された譯で座いませうだが毎度も申し上げ
 ます通り人の性の素善で座いますから如何ある悪人も善人の振と見て嗚呼惡いつたと感覺と
 惹起し一旦後悔爲た以上は悪人も忽ち善人に成りますもので茲が即ち造物主の御師が佛の
 人形と出したり鬼の面と出したり成さるる算段で座いませうか閑話のさて措三府の中にも實
 に東京の賑はひは非常なもので中にも縁日と申しまして五日の水天宮十日の琴平其外毎日の様
 に年中引きも切らず御座いまして其内にも五の日と十の日には小川町の五十稻荷と云ふのが大層
 盛んになりまして彼の邊の賑はひまする事商人あそが大層出ましていつも群衆雑沓と極めま
 す「オイ拜むなら早く拜んで行ねへ」△「拜むのら手前拜む事の有なら序に賽錢と上て呉れ」

「ナニ又吾に賽錢と上して手前が拜むの何時でも手前賽錢と上た事は無へッマア何しろ拜
 んで早く行のら」△「ハチくくく」(柏手と打つ音)南無小川町五十稻荷大明神様。「オイ
 くく人が聞て笑ッア小川町と云ふのと稻荷様の名だと思つて居やアある五十稻荷と云ふは五の
 口と十の日の縁日で夜見世が出るから五十と云ふのだまた其れ處の此間も回向院に行つた時な
 んども回向院様と何の事は無へ勸化と見る様に回向院佛堂くくと云やアがつた淺草の眞乳山の
 聖天様へ行つた際も其拜み様が可笑くて吹出したぜ何と云ふと思つたら聖天對馬守くくとする
 で軍人だと思つて居る奴だはハハハハハハト笑ひながら二三歩參りますと「オイ鳥其地
 に居る年増と見るつて事ヨ斯云ふ權妻は餘り見ねへ美婦的だなスコッ年は學て居るがどうも
 須敵な婦人だぜ」△「左様か髪なんぞはゴテく頭髮とは違つてナ清潔爲て居るせ何だつて香氣
 を嗅てへ連でも居ると悪ねへら止ねへと云ふに植木の花と見るよりも物云ふ美婦の奇麗ある
 と手折ねへまでも見て置ねへと友達の話にいま一人の假兄様の男が何氣無く振返つて見て驚愕
 ○「熊や彼婦は知て居るヨ熊」へニ假兄の知己で居る女ですの○「コレく大きな聲と出ちや
 ナ不可へ彼婦人は三年前に箱根の木賀で別れた吾儕の圓のな静だ熊」へニ平常話の有つた婦公

は彼の年増でへ。ちやア呼んで近づき成りませうの。○「否々止せ大模様ナ扮装りで美麗に爲て居るの旦那でも取て世話に成て居るのも知ねへマア止ねへ〜ト何の思に黙諾まして。○「彼な兩人共今夜外神田の花清で一杯遣らうと思ふたが明日に延して別れるせ今夜如何しても彼の女の跡と追つて儘かに何處に居るの見極めなけりやアあらねへのら氣の毒だがこゝで別れて又明日になると浮馳走とるせ。熊「なんて云つて外視してテキト花清ト云寸方マロツ。○「大きな聲と爲るなれば左様とくらひ込まねへ様に仕ると制しまして友達に別れ彼の婦人の後を追て参ると彼の婦人は供と連携して縁日の買物と持せて段々と兩人は外神田の方へ参りますのら後に成りて密と見へ隠れに附いて参りますと神田五軒町の新道で新しい格子戸の前で静「ね婆さん大きに浮苦勞でした。婆「ハイお買物の包みと。アノ旦那に目には掛りまるとお話が長くなりませうのら是ては免下さいまし。静「明日早く出。婆「有がどう座いませと未だお女中は歸宅になりませぬは。静「彼のお龜の子彼れば親の病氣と云つて下つた限り二三日も歸宅て来ないヨ多分来まいのら代婢の来るまで手傳つてお呉れ。婆「ハイ此節は夜分に成りますと針の目途の分りませんものら仕事も出来ませぬので遊そんで計のり居りますのら。アノ毎日参堂ましてお手傳致しませう又

夜にゐると宿席へお出のお供なぞされますのら快樂で御座います左様なら御免なさいヨ。静「勘忍してお呉れヨ老者に送られて来るのでわ無のつた氣の毒な事ト格子戸と開て内に這入戸と閉て錠と下す故以前の男の裏口へ廻り但見ると庭園が有まとのら生垣と密と破つて忍入り内の様子と様先に窺ひ居るとも知らず宅内では暫時過て竹「ハア〜(吐息つく)オイね花〜歸つて来たの。静「未だ起てお在の。竹「ハイヨ一寸此處へ来てお呉れ用が有のら此處へお出。静「五月蠅ぢやアないの。竹「ハイ左様云はずと一寸〜。静「薬でも飲み度なのへ。竹「いや別に薬は飲うと思はない最う和女に厄介ある成ぬのら面倒だらうけれども今夜吾儕の話と聞て呉れヨ。静「エ、何だの知らないが妾は用事が有のら敵手にあれないヨ。竹「何卒左様云はないで聞て呉れる。静「云ふ事が有るなら其處で勝手にお饒舌なね。竹「オイ和女は病人の己に掛はねへで日遊夜遊の世に爲て呉す宅にとては少しも居らず今迄は小言と言つたが今日と云ふ今日は吾は最う諦めと附で仕舞た若い女房と持つて邪見に爲れるは和女の悪いのには無い天道さまが皆罰とお當なさるのだと今夜こそ思ひ當つたのら慚悔に罪は滅ぶると云ふのら和女に聞せて置きたいそうして吾儕が死去を跡にて若し身寄の者が有つたら語り傳へてもらはうと覺悟と爲居るのだから不好で

有らうが情願吾儕の話と聞て來れるヨ和女は湯島の矢場に出て矢取女と爲て居るのよいなと
 して、（さうして）彼の近所に行き彼地此地に誘連まはつたのが縁と成り深くなつてゐる幾何位か前
 借と還して身が引けると段々和女に話と聞と正直は此れ丈け借金があるから返済て連れて行つ
 て呉れと云ふのら身受を爲て宅へ入やうと思へい女房お幾がゴタ／＼ト入釜敷云ふが面倒でな
 らぬもへ途々可憐そうに彼のれ幾とば喧嘩面で暇と出して仕舞てハア／＼（吐息つく）後へ和女
 と引入て暫時消光て居るもの、段々思考へて見ると離縁の意見が思ひ當ると云ふのは吾の
 愚痴何と隠らう此竹藏は江戸の出生若年時から放蕩に身と持出し家に借財が累んで來て如何に
 も体の振されぬ出来ぬへで江戸に住居も成るい處のら京坂邊へと志し駿州府中の知己と便り暫
 らく世話に成つて居るうち縁有つて本通の遠州屋清左衛門様と云ふ塗物問屋へ奉公に済込主人
 の愛目出度て番頭と遣出世なし其處で心棒するが當然だに吾儕も若氣の誤まりに御主人の御家
 婦のれ山と云ふ者と不義と働らさう／＼に静と云ふ四歳になる女兒の有るものと置去に爲せ
 てお山と連れ六百五十兩の大金と持參て其家と逃走し跡とくらまし静「エ、（嘆息）其跡とのれ
 話とば明白聽してお呉るさい」竹「オ、聞て呉れる氣に成つたのト暖さ入て冷たくなりし藥と香

み胸と擦りて又云ふ様、竹「其れのら箱根と越すと足の附と云ふので其お山と竹與に乗て沼津の
 宿のら横にされ伊豆の國九折嶺の非山越と越る際雲衝斗りの大の男が立現れて強談文句吾どか
 田は一生懸命何卒助て下れる逃走もので金子とては爲いと欺はつたが中々賊は聞入す金の有こ
 と見て附けたと致圍荒く強迫のけられ守らう時にお山さんは助と蹴られて氣絶の体立寄介抱せ
 んものと側へ行くと爲る時しも衝飛されて後向きお其儘おんは轉りに谷底へ眞倒暫く夢中
 で居たのに人の呼聲耳に入り眼と開き見れば所の人の介抱受け漸々氣が附き其れより樵夫の宅
 へ行きた陰で生命は取とめて見れば懐の金も依然五百兩其儘有つた事なれば其れに氣と得て
 段々と譯と話と金子と與へ大勢で手分と爲てれ山と探して貰つたが殺されたやら如何爲たやら
 一向行衛も譯らぬから詮方なくも其れよりい我身の療治お日と費やし漸く傷處は直つたが……
 ……腰が立たず村の人の云にのにも是りやア湯治とする方が宜らうとそれより熱海に來て湯治と
 爲し寝起も如何の出來る様に成た其當時隣座敷に居た客は東京の人にて深地に世話と爲て呉れ
 兄弟の様に心易くそれより病も全快して其人と同道して東京に來て世帯と持て貰い受た女房は
 此間出した彼のれ幾經濟向が上手たので内の金融も宜なつて五百兩の金と資本お日歩の金や高



利と貸て今ぢやア公債證券と所持て樂に消光て居るのも皆な女房のお庇蔭だ其と和女の容色に目と呉れ離縁たのも皆お天道さまが見通だ吾に罰は報つて来る是も自業自得と謂ふのな三日でも御主人に爲たお山さんと大金と持て逃げるなどの重罪人まだしも和女に邪見にされる位は結構だ壘の上で死ぬるのは不思議と思ふて居る今更先非後悔した其に附てもお山さん何處に如何して居ることやら生死の程も未だに知れぬば情願和女にお頼だ若し其人に出遇た際は此竹藏が前非と悔んで話と爲たと宜く傳へて呉だされコレ………ね花和女は先刻のら泣て居る様だが邪見お和女が泣のに何ぞ關係の在人の静「ハイ(泣)何卒今迄の邪見に爲たは堪忍して下さい升竹藏さまどうぞ堪忍して下さいまし何と隠しませう今の談話に静岡で四歳の歳に母親に別れたましたれ静と云ふのはハイ妾しで御座います竹「ゲエー(喚驚)何にワヤ」私 が左様の其ぢやア和女がね山の遺子主人の娘で有たの左様云へは思い當つた事の有た指折敷へて見れば恰度主人の娘の年齢格合娘に爲ても宜位の和女と女房に爲て居るは精神に恥じる事と思ふたが名義と變へて大家の娘が如何云ふ譯で湯島の矢場で矢取女に成つて居たサア〜其れと早く聞せて静「アイ(泣)竹藏さま(泣)どうぞ聽て下さい升竹藏が懺悔話より振返へつて我身と見れ

ば恐しい程懺悔と致さなければ成りませぬお話申と其中にも御用と云ふ聲が掛れば腕と廻さねば成らぬ大罪と犯しましたもので御座ります竹「何お大罪と犯したものは静「ハイ四ツの時母親に別れ其のらは繼母の手に養育受けしに十七の時寺町の小川座に出動て居た旅役者の尾上菊壽に連出されて親の金と盗み出し衣類と持出し其情人と逃出しまして奥津の消氷屋と云ふ旅宿屋おて其情人に捨られて金は素より衣類まで持て逃られ今更に内へは歸れず寧ろ死で申譯と覺悟と極めし其處へ隣座敷に居りました品川の新宿で甲州屋と云ふ葉茶屋の旦那義に勇ひ深切に欺詐らるゝとは露知らず其人は品川宿の東海寺裏奥馬場と云ふ處に住み勾誘と家業に致す甲州無宿の岩五郎の手に落まして遂に其人の女房に成つて據なく五年と云ふもの共に消光て居りましたが妾と武州の八王子へ娼妓に賣うと仕組れて連出されましたがどうも身の浮む瀬が有ませぬら日野の原にて……實の妾が手にうけて岩五郎と殺しました其時五年目で又尾上菊壽に遇まして二人で横濱野毛の花咲町に夫婦に成つて消光て居るうち尾上菊壽に病はれ藥の料に差迫り遂に高島町の仙境樓に身と沈めまして腹はたと申し勤と致して居る甲斐なく菊壽は遂々病氣の爲め醫家客の敷に入りそれら便る處も無く勤て居ました其うちに伊豆の吉松と云ふ

人夫婦約束と務しました其時藤澤在の淺場村で豪農の聞へある金山大六と云ふ人に金ゆへに身受と爲れて圍はれ中……サラ之れとても明して云れませぬとですが夫婦約束と致した吉松と言合せ木妻お民と無きものにならせてぬく〜と後妻お成り濟し又吉松の手と以つて大六も押し附其吉松と弟と言なし親類中に一はいくわせ宅へ引入れ夫婦同様に淺場村に消光て居たも僅の中間細の事より野州熊と云ふ腕車屋に悪事と見現され度々金の無心に来るゝら是では隠見の端緒と有金残らと引さらひ夫婦手に手と取合て箱根の木賀に隠れて居たに探偵方の向ひれて殿しく御用々々云ふ聲に驚ろいて妻だけ其場と逃延ましたの儘吉松は捕縛れたと見へまして今に行術が知れませぬ妻は逃れましたと僥倖と分装と變て信州より上州地方と二年越迷ひ歩いて漸々と又東京へ忍んで出で名前もお花と變まして暇味の矢場女と化て居たと貴郎のれ庇蔭て樂々と今の身には成ましたが持た病の我儘氣隨で邪見に仕たも何卒堪忍して下されませ其に附けても母親のれ山さんは思ふお方と夫婦に成り何處に消光成さるゝと思つて居たに其れでは非山とやらで賊の爲に別々に成なされましたと仰しやれば其盗人に殺されたの其後便りはお聞あされませぬの 竹「サア生死の程も譯らぬ故へ未だに人に聞合せて居るも一向在所が知

れぬいが嗚呼悪い事は出来ぬものだ親の因果が子に報い恐ろしい者にあんなすつた併し成丈け舊惡の露見せぬ様注意て最う此後は改心なさいヨト慚悔話に吐息つら共に言語は泣々も首と垂て居りましたが折しも庭の方に於いて「アイマ……コノ畜生とたまざる聲に此方の兩人はピツクリ致して 竹「エ……マア何だへ今の聲はお花チヨット障子と明て見な 花「ハイとお静のお花が障子と明け庭中を視廻せども更に入音もございませぬので 花「チ、ピツクリした誰も居りませぬよ何でせふぬい 竹「ソウサノ事によつたら曲者もしれない無氣味だ早く戸締りよくしてね呉れ……

第拾一回

チ小僧手前何處だこの何と云者だそれと云へよ小僧「へエ寔に濟ませんトノ事と致しました畜生のともへ何卒御勘辨なすつて 男「御勘辨もアカンペイもないやマラ棒め已がケシカケたのら喰ひ付たのだサ何の意恨で吾に此様怪我とさせやあがつた 小僧「ドウ致してケシカケたのではありません貴方に意趣の意恨のと其様とは御座いませぬので 男「ろんならナセ此様人間に喰ひ付様な犬と飼て置やあがるのだ 小「イエ是迄溫和しい犬で人様に喰ひ付たとぞは御

座いませぬ 男「嘘とつけ何より証據だこれ視る此通り喰ひ付たじやない此儘じやあ濟されな
 い手前の宅といへよ泣たつて勘辨できない汝の様な小僧子に談は無駄だ汝の宅といへば宜のだ
 サア云るゐる 小「へエと云ふ御勘辨と…… 男「勘辨できぬ此様疵人にされちやあ翌日あ家
 業が出来ぬい何でもないら汝の宅といへ何處の何と云者だ 小「へエわ私しは田舎者でござい
 升が東京の縁家へ参つて居る者です 男「其親類といへ 小「へエ其親類と申せばサキ此先町で御
 座い升が彼夫は田舎の私家に永年飼てありました夫で今度東京へ参る時も私しに附て参りまし
 た故捨るにも棄られず東京の叔父さんからも夫と何處へ遣て仕まへと堅く云付つてとり升が
 何處へ遣ても捨ても直私し方へ戻つて参り私しがあ湯へもくにも附て参りますので實に困つて
 とりましたが今此様不都合と仕出るして叔父の耳へいれましたなら何は小言と聞る知れませぬ
 と云か御勘辨さすつて下さいまし茲に少々計小費錢がござい升これで膏藥でもお買あすつて御
 勘辨下さいまし 男「何だ五拾錢計はつばりの端金はいらぬ 小「夫で御勘辨相成すは夫の代
 りに私しと何様にでも御存分に爲さいましてそれで御勘辨と願ひ升 男「馬鹿といへ汝をいとい
 目に遇したとて此疵が愈るのへ何でも汝の居る處と云ば宜のだ 小「へエ只今申す通り親類の

厄介になつて居ります上に此様な事まで迷惑と掛ましては私しも居憎ふ御座い升ら御勘辨相
 成すば田舎の實家へ歸りますと申した處が自家には誰も居りませぬ故田舎の親類へでも行ませ
 ん貴郎も田舎までいらしつて 男「フザケル田舎て田舎は何處だ 小「へエ田舎は相洲藤澤在で
 男「フン…何と云ふ村だ 小「淺場村と申します 男「ナニ淺場村ウん其淺場村の何と云者だ
 小「金山大六の悍大助と申します 男「エ…… 小「貴君は御存じです 男「イ、ヤ知らないナ何
 で知てる者か前は亦何で東京に来てゐるんだ 小「へエそれはあの…… 男「何を泣のだ 小「あ
 ……の一年父上様も母上様もわ……曲者に殺されろら家はメチャクチャにあり親類中寄
 合て一旦家わ片付て仕舞私は東京の叔父様が引取り追付立身出世して家名再興仕なければなら
 ぬと云付つてとり升が今日は日曜もへ學校と休み朋友の處で只今まで遊び今戻りますところ
 此様事と仕出るし叔父の耳へ入ましては何も濟ませぬ氣の毒様ですが田舎までいらしつて下
 されば田舎の親類へ譯と頼み貴君へ何様にもお詫を致します 男「ア、悪い事は 小「エ、何で御
 座い升 男「ナアニサ悪い犬だと云事さ何して其様遠い處へ往れる者仕方がないやう云譯あら
 己も途中の災難と諦めて勘辨しよふが彼畜生はそこへ行たるふ 小「大略モ一叔父の處へ戻てを

りませふお氣の毒な事と致しました 男「ドゥモ詮御がない因縁だと 小「へエ 男「イ、ヤサ畜生の仕業で喧嘩にもなるまい憎ひ畜生だあの犬はお前の家に長く居るのか 小「エ、われは久しく飼わる犬で死んだ親父が大層可愛がつて居つた犬だろふで夫故私もツイ可愛がつてとりました 人が様に喰ひ付様では固ります故モ一今度は吃度棄てしまひませふ 男「そりやあ何でも宜やア、おまへも運の悪い子だ話して聞いて氣の毒にあつた遅くもらあ内早くゆきな 小「有難ふ存じます是は少々でもお薬代に 男「ナンノ其様心配はいらない氣と付て行なよ 小「左様ならお別申します 男「アコ……チヨット待あへおまへ何も不自由な事はあるまいがのコリヤ吾の寸志だ また學校の書籍でも買時足にしてくんませい 小「とふ致しまして飛でもあいな怪我とさせた上其様物まで頂いては却つて叔父に叱られます 男「ナアコサ隠して置やいのだ 小「有難ふ存じます 小費は叔父がくれますから 男「それはろふでもコリヤア吾の志ざした取て呉んあさい 小「イ、エとふのお仕まいなすつて知ぬお人にお金なぞと頂いては濟ませぬ 男「成程コリヤア左様の學校へ行から伶俐だそれぢやあ強まい暗いおら氣とつけてゆきなへ 小「在難ふ存じますと悄然として別れ行大助が後る影暗夜乍らも見送くるは是なん伊豆の吉松にてホット歎息獨言

「吾故兩親に早く別れ悲しい想ひとするのみの現在親の敵と知らず頭と下て詫入し子供心の不憫さとおロリとコホス一筆は所謂性は善なりで流石無頼の悪漢も真如の月に照されて本心に立返りし「ア、悪い事は出来ない世の中因果應報と恐ろし者だ馬鹿々々しい畜生に敵と取れたカシマア暗夜で伴ひ對手は幼童と云乍ら互ひの顔に覺へあればモン見知られたら大事だつてア、危険くドレ先刻の家へ取て返し因果同志で名乗合ふの

第十二回

モシ御免下さいお休みですのチヨットと明なすつて 静「ハイ何誰でございますへ 吉「へエ御目にかへれば分るんでチヨット愛をお明なすつて 静「お名前と仰しやつて下さい 吉「へエ何で伊豆の吉松です 静「エ、マア珍しい吉松さん何して茲へ 吉「寔に夜分あがつて濟ません真平御免下さいと障子と開けてオット這入被つて居た手拭と取ますと凄味の有る鼻の高いキリツトン男竹藏に會釋いたし 吉「へエあなたには始めてお目にのります私は吉松と申す不調者でござい升 竹「ハイおいでなさいませし病人でありますのら御免あさいお静此方は知ているか方の静「アイ先刻お話し申した伊豆の吉松と云ふ箱根で別れた妾の亭主で御坐り升 吉「私の為には現

在の姉さんと云ふのと露知らず夫婦に成て居りました者實は先刻お庭の隅でお二人さんの話しては済ぬことだが立聞いたし始めて了解た竹藏さん失禮は御免なすつて下さいまし 竹「ハイお静は和郎と亭主と云ひ和郎はお静と現在の姉弟と云ひなさるが一向譯が解りませぬが如何云ふ譯の聞せて下さい 吉「申上げるは面目ないが貴郎と伊豆の非山越で谷底へ蹴落したのは私の親父日金の勘五郎と云ふ盗人で御座り升お前さんと谷へ蹴落した跡は其お山と云ふのが悪るのと無理往生に連れて来て抱寝と爲ました其種が妊娠て生れ落たのは面目無いが此吉松で御座へ升お袋は私の十歳の年前非と悔て書道と殘し此様な畜生の様な身の死所に相應る駿州狐が崎で身と投て死で仕舞と恰度私の親父が旅先で殺された三年忌の夜旅人の置殘した其金と私の小使と致して家出と爲れたら其おら私は下田へ出て成長るるに随つて悪い事には氣が遣入賭博が好で逸々遊人と成つて伊豆の吉松と云ふて姉さんがお話の通り横濱に遊んで居た其際に仙壇樓の賑はたと云ふのに買馴みに成りましたが同胞の姉弟とは夢いさゝらも知りませす貳年跡に箱根の木資で別れたまゝ生死も知らず居りましたに今夜五十稻荷で冴らすも姉さんに出遇未だ亭主氣取で御座へますら跡とつけて参りました忍んで様子と聽やすと驚愕爲たのは同胞のら出生

た姉弟竹藏さん貴郎は親子のものど抱寝と成さるし私は實の姉とも知らず又姉さんも弟と知らず枕と交すと云ひ揃いも揃いし畜生道何たるいんがの寄合のと思へば思ふ程淺ましくア、熟々人間が忌になりました 静「眞に其様な事とは知らずして弟と枕と交せしはア、面目ない 竹「それも互いに知らぬ事として今とあつては是非がない是も何かの約束事と諦めるよりはる詮術がない夫はろふと吉松さんおまへ足とどふのお仕のへ 吉「エ、飛だ災難に會ました失禮ですがコレ御覽下さいと片足とさしのへ結へし手拭と解きますとフッラバミの骨へのけ一ト擱程の肉と掻むしつた様で一ト目視てさへ身の毛も逆立ばのりの大疵コレはと兩人も吃駭致して 静「吉松さんおまへマア何したの大變な傷だねい 吉「サア此疵に付ては不思議な話しが在んで實に今夜といふ今夜は驚いちまつたんで 竹「何は兎もあれ其儘じやあ置れまいお静醫者様と呼だら宜ろふ 吉「イ、エ有難ふ存じますが今夜はマア是でよふがすドゥセモ一不用な体で明日でも見て貰ひませふマアお二人とも聞て下さい因縁と云わ恐ろしい者で先刻お静さんの跡をつけ庭前でおまへさん方の身の上話と立聞する中出抜に背後から大きなむく犬に喰ひ付れ痛さに思はず聲と立ました 竹「ア、それじやあ先刻のアン聲はおまへさんのへ 吉「エ、私です夫柄犬めを追のけ

たが何處へ逃たるサツハリ丁解す痛さ堪へて歸るふとする途中十四五の小僧が頻に犬と呼んでる様子此奴の飼犬だなど心付おまへの飼犬の大きなフチ、犬で首へ環とはめて在のわと尋ねた處が其小僧の云のには私しの犬でござい升が今方何處へのマダレましたと聞いたら承知が出來ずヤイ吾お今てまへの犬に此通り喰い付れて大傷と受たのだサア汝の宅と云へ何處の誰だど聞糺した處が子僧も迷惑想に自宅と云す夫ら脅しつスカマッして止の詰り小僧の云ふには私ハ此先町の親類へ厄介に參つて居る者ですが親類へ此様事と聞せたくありません柄田舎の實家まで來て呉れるどの様にも詫とするからと云ふとさあ夫柄田舎は何處だど聞いたら相洲淺場村の金山大六の倅大助と申す者でと聞いた時は私は實に吃驚しちまつた 靜「オヤマアあの犬助がどふして此らに 吉「夫がサツハリ因縁とでも云のたるふよアノ犬はろれおまへも知てる通り金山大六と殺害した當座畜生乍ら吾と敵と思つての吾と視ると襟毛と立喰ひ付想で無氣味故イッ殺しちまはふかと思つたが否々大六が常々可愛がつて居た犬と今此矢先殺したなら村人が亦變に氣と廻すまい者でもないとの時の時ろれ鎖で繋ぎ置たつけが執念深も未だに吾と敵と視ひ今夜仇と返したのたる畜生乍ら感心な者今夜の怪我も元を糺せば此方が悪いのだと氣が付た

故怪我の仕損と諦めて子細よく別れたが彼是と想ふにつけ悪い事は出來ない者と今始めて氣がつきました 靜「何して亦おの子が東京へ來て居るのたるふね 吉「されば大六夫婦とまへと二人で亡人にした後は親類中が打寄て一旦家とマ、ンでしましアノ大助が成長する迄東京の親類が引取今學問修行中で成人したら金山の家と再興する積と聞たときは吾は思はず涙がこぼれたア、此子供が艱難するのも皆吾等が作つた業と想へば殆ど氣の毒にあり鬼の眼から涙とこぼしました 竹「フン聞ば聽程不思議な因縁恐怖ろしい物だア、悪い事は出來ませんおまへ方も是柄モ一改心してお呉なさい先づ當分は吉松さんも私の宅で療治と仕なさい 吉「有難ふ存じます何處と定めぬ天然浪人御病氣の處へお邪魔でも少々傷所の愈るまで御厄介様に相なりませふ 竹「繋がる縁の私が家氣遣なく居るさいと是柄伊豆の吉松は此竹藏の宅で醫師にのり傷の手當と致しましたが何分深疵故果せらす其此するうち傷所より發せしものの大熱となり夜分スヤク眠付と思ふと寢所の上へ勿起て全身汗を押し流し目とッリ上恐ろしい顔色で 吉「ア、大六さん私が悪いマ、お内儀御勘辨マ、其様められちやあ苦しい私が曲いマ、苦しいと云ふの御勘辨免して下さいア、苦しいと大層と上げて叫びます故竹藏もお辭も吃驚致してコレ吉松さん確乎

「をし難も居やアしないやね何と云のだ確然としよと云われて漸々心沈着ハツト息と吐き其
 處等視廻し全身の冷汗と拭ひまして 吉「ア、苦しうつた大六夫婦が恐ろしい見相で私の咽喉と
 めやアがつたア、苦しい 静「何を云のだねシツカリと仕よ悪態にも似合ない皆な自分の神経だ
 わね 吉「ア、吉松も意氣地がなくなつたモ一宜しい有難ふと横になりスヤ／＼睡ると思ふと
 亦刻起免して下さい金山夫婦ア、苦しい私が悪い免して呉いトの大聲またお静が宿めて臥かす
 亦刻起るといふ次第で凡そ一ト晩に三四回位勿論日中は左様な事も在ませぬが夜分に相成と
 始まるので近所隣りでも不思議に思ひ種々影評判竹藏お静も是にはホト／＼持余しました昔
 時あら幽霊との怨靈の祟りとの申す處で凄々怪談でござい升が開明の今日左様な事は申上られ
 るせぬ矢張汝に出て汝に歸る積悪の報で自ら心經を狂わせるものでありませぬ其邊の理合わ
 理學的先生でなければ判然とは了解ませぬ借一日病人も大きに沈着居る様子に 竹「ドゥだね吉
 松さん氣分は宜いね 吉「ハイ有難ふとござい升盡の中は例乍ら熱も静まつて居ますが夜分になる
 と寢にお世話をやのせる想で自分乍ら一向了解させぬ氣の毒様で相濟ませぬ 竹「ナアニ濟も
 すまないも無が吉松さん大らかな聲ぢやア話せぬが固つた件は每晚おまへが大きな聲で騒ぐら
 近所隣の人達が種々と密語様子例へにも人の口には戸が立られずでモン此事が探偵人の耳へで
 も這入れた時は夫こそ大事私ばうれが心配でならない 吉「ヘエドゥモ種々と御厄介様に成て相濟

させん御存じの通り斯云豪病に取附れるも矢張落目に崇めで今となり悪業が報ひ來て此身を賣
 る事と存じませ故生て居ても詮ない身体お上官から手當の無内爰等で年貢と納めませぬお静さ
 んイヤサ姉さんおまへも一所に悪事と仕た者所詮天罰は退れまいアア姉さんは迄の因縁と歸
 めて弟ふとの吉松と一所に死でお呉なさい 静「ハイ私も覺悟として居ますよ 吉「サアろふ件が
 極れば竹藏さん改めてお願ひがござい升茲に恐銭とわ申し乍ら金子が百圓計りござい升覺悟致
 した私等には不用物此金子の半分と後日おまへさんが序もあつたらば相洲淺塚村の金山大六の
 菩提所に往き大六夫婦の後世のため脩堂金に納めて下さいとメては萬分一の罪亡ばし姓名とい
 わず金山家の縁者と云て香花料に差出して下さいまし殘金はおまへさんの宜しき様に 竹「コリ
 ヤア宜處へ氣が付れた此上は後世こそ大事委細竹藏が確と吞込ました朝に道と聞て夕べに死す
 るも可りで善心に翻がへつた處はユライ嗚呼成程惡に強さは善にも強しと寢に感心サスガ
 惡黨 吉「コレハ御相摺イヤナコ竹藏さんサア意氣地の無へ奴等だとお笑ひらは知りませぬが情願
 私共姉弟の死んだ後は菩提と吊らつて線香の一本位はお立成されて下さいまし 竹「ハイ能く其
 了簡に成つて下された(泣)一本處の束で上ます(泣)アア因果同志の寄合だから仕方があいが
 全体是が本筋なら今と盛り若い者とムザ／＼と殺しどもあく死しどもない止だてするのが本
 正なれど今も吉松さんの云われる通り所詮逃れぬ二人が大罪ナマツ未練に止だてして愛死願と

のころふよりはと死に往身と勤めやる竹蔵が腹の中五臟六腑と裂る、思ひ何は悪業とわ云乍ら
あんまり残酷たらしくて物が云へないア、愚痴だ、併し成丈世間にバツト知らせない様に水
盃の代りに一献斟ませふと涙拭ひ此方に向ひ 竹「お静一寸酒下物の用意として此處へ持つ
て来て呉れ 静「ハイト言葉も盛り聲泣たなららの酒宴に此れが現世のお別れかと姉弟互に心と
ば洗ひ清めて呈す盃も死とまつばかり梅が香の馨ゆる春とば未來にて閻魔の應に往ことと思
へばたけき悪質も性れのまゝの静やうに心根さへも吉松と翻るは素と之れ性善の聖人の教への
尊とさよと喜ろこぶ心の竹蔵も今は曲りし性根さへためて直してなよ竹のよにも嬉しき言葉と
聞くも此世の思ひ出と互ひに善にかへり花咲くや咲るすや應報の無常の風に散りて行く此の大
團圓は次回從容と。

第十三回

「引續きまして一席演し上げますは怪談伊豆の吉松の情話で長々と御高聴と汚しましたたが本
回は此の情話の大團圓にて前回は申上げました如く神田五軒町の竹蔵は静岡本通りの主家遠州
屋のお嬢さんとも知らず女房に致し居ましたに病中に在りよして何か心に思はく在て今迄の
事を悔悔いたしましたと聞きいるお花も其話に初めて悔悟の念と起し身中の事を包まず慚悔い
たしましたに始めて知たお山の遺子を静に二十餘年振で再會の思と爲し思ひも奇すお山の腹の

ら出 生爲たお静の弟の吉松も遇て具にお山のことまで聞知りましたがまた其れのみか現在よ
同胞から出た姉弟が二世と契りし妹背中俱に悪事を働らきて重なる罪に身を賣られ極悪翻つて
性善と洗ひ清めま心根に消ゆく身とはあり升たが又自分の身を顧慮れば知らぬ事とは云ひあが
ら親子の者を抱寝せしと惟へば因果の寄合と且は呆れ且は悔て餘處ながら 水盃を酒宴に代へ
暫時俱に飲み合ひまきて盡る名残にあらすして人目を憚かり兩人を出して遣りましたがさて其
よりは日々に兩人の事を案じまして今日は自首せまか翌日は御訊問の沙汰あるかと世間の風聞
に耳を傾ひけ亦多くの新聞紙を見まするも一向似寄の名義さへ出させぬから唯病床も着きま
し案じ煩勞ひ獨り言 竹「ア、兩人とも彼れ程立派に言つては居たが矢張生命が惜いかして何
處へか逃げて仕舞たか兎ても悪事を隠し卒せる事は出来まい却へつてお政廳の手に捕縛れ後世
までも恥を知られし其上に重き罪科を受くる事が可憐そらだ嗚呼(嘆息)人心は頼み少き物
は無いトホロリとこぼす一粟甚と濕りげも居りまゝ處へ門口から 配夫「郵便山田竹蔵は此處で
そかと投込む一書「下「ハイ、此地で御座りますト郵書を受けとり座敷へ通りまして「旦那さ
まお書東が参りました今日の配夫は町噂で御座いますまたト渡すを竹蔵受け取つて 竹「ア、配達

人も近頃は、大層町噂も成つたか多くの中よりは官員までも成つた様に思つて威張人があるて下
エー、有ますとも妾の實家の長屋から出る人は此の間迄で人力車を曳て居りましたが近頃
は配達人と商賣がへを爲ました日から其の人の女房が井戸端までへ出ますと長屋の者も云ひ
ますよ宅の君はお役所へ出勤ますから朝が早く御座いますして僕が恐縮致すと申しましたヨ竹
「ハ、ハ、(微笑)またお龜が笑はせるかト書東の封を切まして一ト通り讀みおはる下」旦那様何
處からのお手紙で御座ります 竹「これは是れはお前も内々で咄したお静の弟の吉松から來た
下」へエ其れぢやアまたおしつさまも何處もかお在で御座りますか 竹「此の書東の文体では彼の
際直ぐも自訴仕様と思つたがお静の云ふは吾儕の病氣が若し重りて死去でも爲たときは取方
付する者が無いゆへ暫時様子を見た上と忍びくゝ近邊を立廻り氣を付けて居ましたか宜く
く思がへて見れば全たく病氣の御平癒成されたを見て名乗て出るは安ければ其手續きを御訊
問あれ駿州表の實家を始め貴郎さま迄でお引合御迷惑を掛ては濟す殊も十餘年前行燈へ書置
殘せし實母お山が投身されしは駿州の狐が崎と云ふとされは恰度畜生の様お姉弟の死所又は能
地と存じはるく彼地へ罷越し底の水屑と相果るからどうぞお身体大切よと細々も書てあるが

アア今も今とて案じくらし居た事だが殊勝にも能く覺期して呉れたト泪に暮て沈み居る下
女のお龜も共涙だ 下「ろれぢやアで新造さまは身と投けて御逝去で御座りますか 竹「連も兩人
は此現世で造くりし罪の重ければ跡の追善供養として未來の苦患と助けて遣らふト無常と感じ
竹藏は病氣の全快を待ちまして事の由と云聞せ下女お龜には物數多遣はし暇と出しまして五
軒町の家財を仕舞其れより頼み寺の住職に今迄での有枝有葉と包つます話し天窓と剃りて戒と
受け名も清了と改めて鼠の衣と身に纏ひ朝代の笠に頭陀袋杖を便りて東京を跡にみしッ、先第
一に吉松の依頼に因り東海道藤澤在淺塚村の金山家の菩提所へ尋ねゆき縁續の者と余所ながら
精堂金と納り大六夫婦の爲衆僧に讀經を頼み懇ろに回向いたし爰と立出で富士が根の靜岡さ
して日と重ぬ狐が崎の磯畑つゞきに参りました折しも村の童子等が寄集まりて遊んで居ります
あら竹藏の清了が「モン子供衆や斯ふ言ふと雲と掴むやうな尋ねものじやがナト未だ言葉の斷
ぬうち一人の小兒が此方に向ひ ○「叔父さん蜘蛛と尋ねると云しやるが此處は濱邊だ蟹なら何
程でも居るが蜘蛛は居ねへやア 清「イエ此頃此邊で若い男と女の情死爲たものがあるなら教へ
て下され 下「アイ其りやアツイ一月ばかり以前の事だが旅の分装で此濱へ打ち上られて居た死
體と村内のものが郡役所へ願て御檢使と受けられた際懐中にあつた遺書に知らずく姉弟夫婦にな
つたと書て有つたと證據にして所のもが施主になりは此の先の數中の尼が菴の片傍へ畜生塚



と云ふ墓を立達て漸々二三日跡も出来た斗りた可憐そうたお僧様助かる様う念佛でも唱へて遣りませぬ。清「ア、何方衆か知りあいが善い功德を成されました街道筋で話も聞き態々尋づねて参りましたト童子達に禮を成し其處を立去り行々もさていお辭と吉松は云ひ遣したる言葉も歸たがはずて母親の後を慕つて黄泉客の數も入しか便やと佛の道も入りませれば常より一層悲嘆も沈み來どもおしよ尼が菴の片傍まで参りました新に建し畜生塚へ合掌爲て念佛を稱へ拜み居りますを菴の窓より菴主と見へまして此方へ向ひ。尼「御殊勝な御僧様其處がお濟も成りましたら此地へ這入て一服お上りませぬ。清「有難う御座ります暫時の内休足爲して下さりませト菴へ這入つて草鞋を解き上よわがつて挨拶爲やうと彼方の尼と一目見て。清「ヤ、尼と云ふのは二十餘年袂別れて程經過しお山どの。尼「オ、葦山越えて賊の爲も谷底へ蹴落されし竹藏どのか。清「是は變つた處で御目も懸りましたませ挨拶は後の事と女は賊の勘五郎が無理往生も女房と成り吉松と云ふ子まで出來其子の十の年も勘五郎を旅先で殺害した敵手が道も迷ひて宿も合せ問はず語りも敵も知れしをまた幼年の吉松が膽太くも毒害して死骸を捨も出た留主も行燈遺書を仕て此狐が崎へ投身爲し底の水層も成たとの事を委しく聞きましたよ如何して無事までへ

消光してお出でか。尼「ハイ無常を感じて愛兒を後も殘して其よりは故郷も歸へり餘處もから生の親も暇乞ひして此處の磯邊より身を投げて死なうとする時引留られしは先夫ある遠州屋の清太郎様事理を解けたる浮意見もて死を止まりて其時より尼とありまして此菴も遠州屋の施主もて月々食料何よかくと送り下され安樂と身は墨染の尼法師佛へ仕へる此お山其れは左様と竹藏さん今も今とて貴僧のお話如何して吉松と云ふ賊の兒まで出來た事又行燈も書置致せし事迄もお承知成つて居在のかか聞かせ成つて下さりませ。清「ハイ其を知つた長いお談話先一通りお聞き爲すつて下されト其よりお辭を知らぬ事とて女房も致しました事より吉松も平らず遇て聞きたる咄し又兩人は舊惡の罪輕からず所詮放免る譯も有らず且同胞の姉弟が夫婦と成りし悪因縁寧ろお政廳の手を煩らはさんより俱も母の跡も隨がひ此處も來て身を投げし其發心も現在の罪科は消て陰も無き石塔とのみ成つるも未來の苦患が恐ろしく且また己も今までの事を悔責て二人の死後怨でろも吊らはんこそ身の罪ほろぼしと頼の寺の戒を受け名も清了と改稱して遙々尋ねて参りましたト有葉有枝の物語りも尼のお山は最前より衣の袖も涙を濕をし閑度毎も胸迫り暫時言語も出ませず漸々も涙を拭ひて此方も向ひ。尼「知らぬ事とて姉弟の身投と不便も朝夕

の手向の水は逆さま事(泣)自分の腹から生み出せし娘を懐で御座りました(泣) 清「如何にも因果の我々ども今更百度悔るとも後の事にて六日の菖蒲十日の菊とるゝしこと云ひ合されと俱々に白衣に身をば纏ふと云ふも是れも何々の因縁づく只此上は死逝者の追善供養と成さるころ佛の爲なり我身の爲め長座は他人の思はく悪し拙僧は是より静岡の古主と訪問て是までの不義の罪とお詫申した其うへは身は雲水にまらすべしト立上る衣の袖と今暫らく聞ことありと止めますると振はらひ心強くも立出ましたは明治十五年の四月中旬のことでは是れ狐が崎畜生塚の由来で拙が静岡旅寝の徒然に郷里人達の話とば聞き得し儘と其儘と聊の勸懲の端にもと斯長しく御高聽に入れました。

彼の相洲淺場村の金山大助は其後余念なく學を勵み天晴の人物と相成りまして故郷へ戻り金山の家と再興致し現に村長と勤めをると申すことであります

怪談伊豆の吉松 大尾

明治廿九年三月五日印刷
同年三月十一日發行

(伊豆の吉松)

口演人

映洲樓燕枝事
長嶋傳次郎
本所區南二葉町十三番地

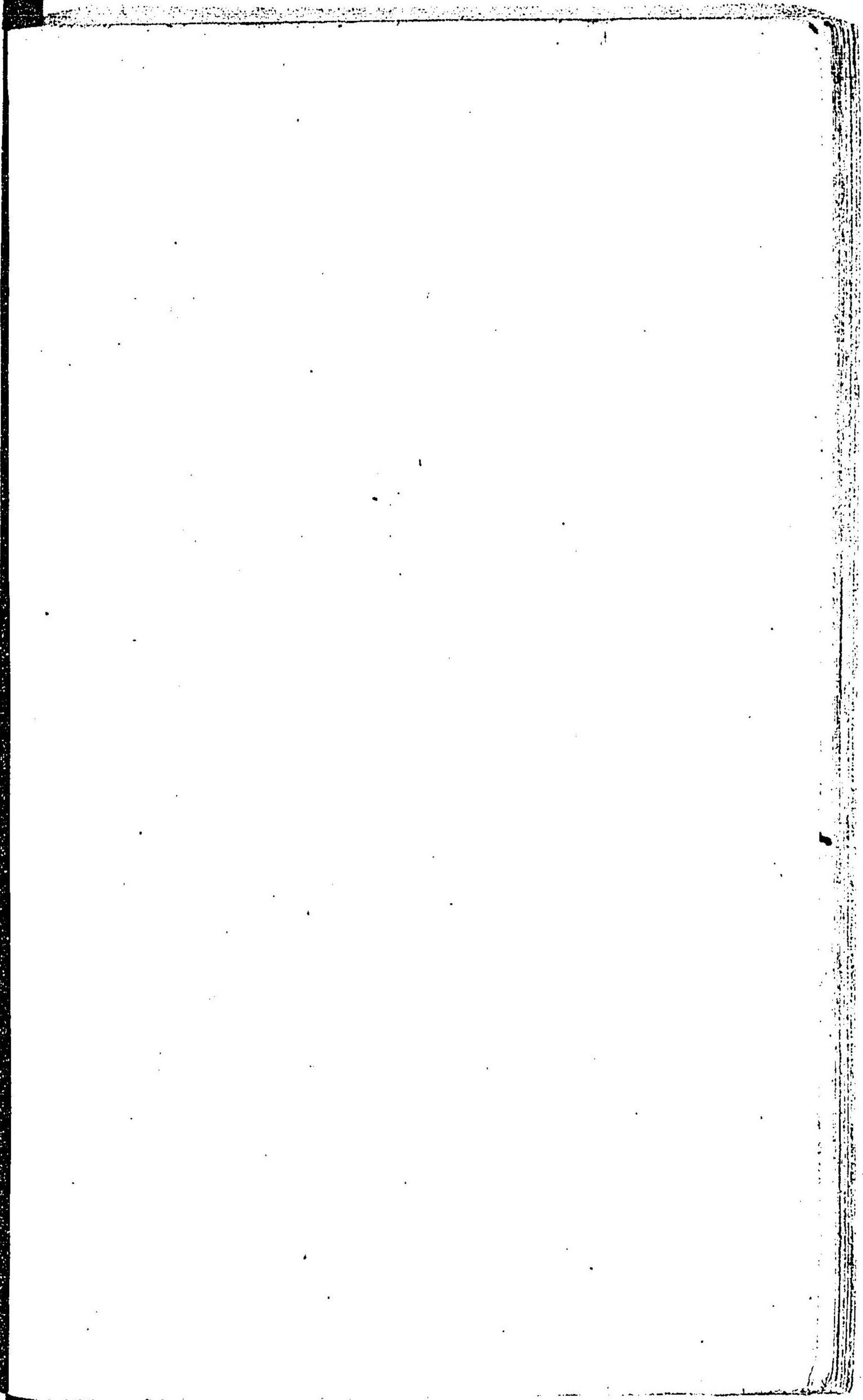
發行人

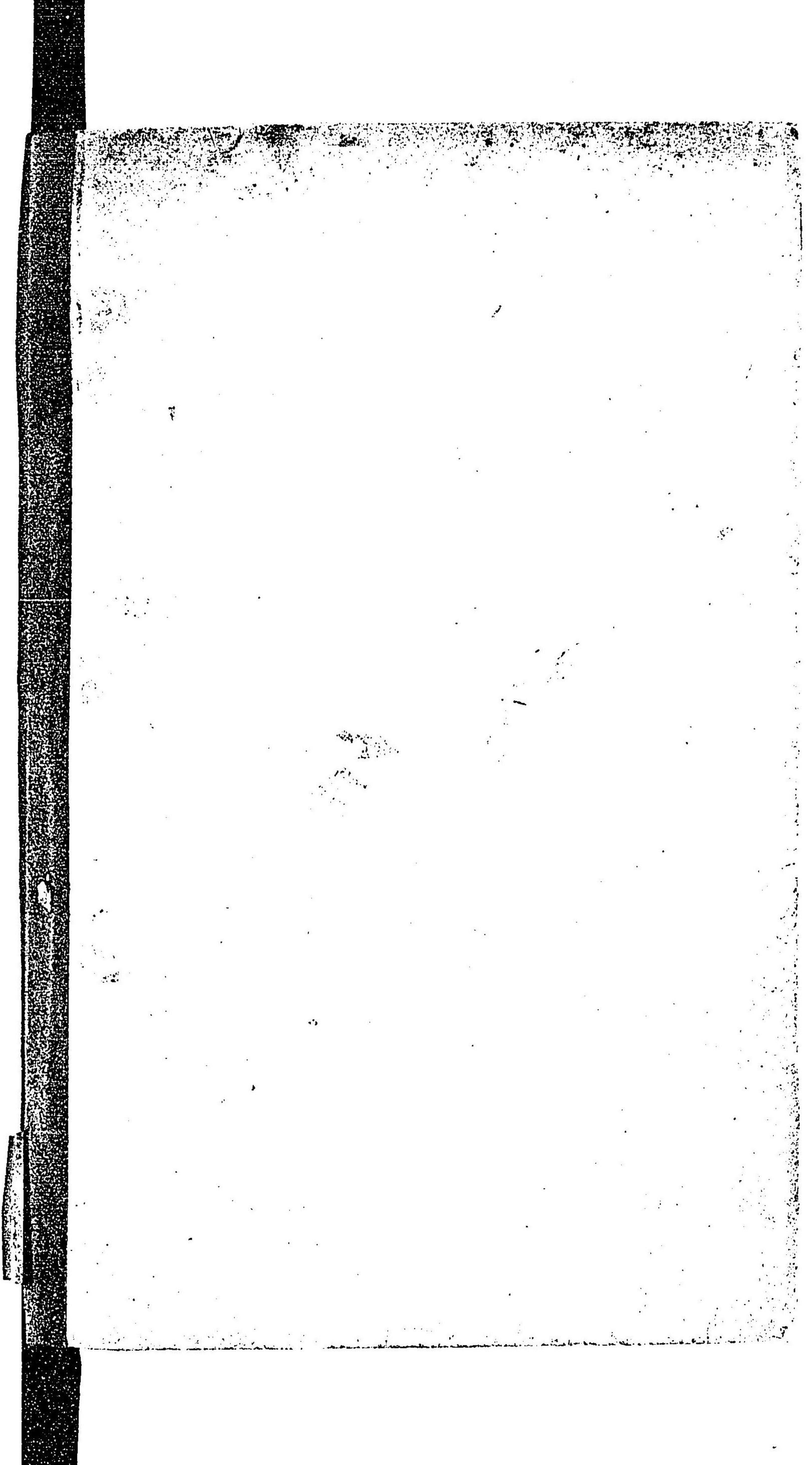
市川路周
神田區佐久間町三丁目三十八番地

版權所有

印刷人

松本秋齋
本郷區湯島一丁目十三番地





特 8

354



097910-000-5

特8-354

怪談伊豆の吉松

談洲楼 燕枝 / 講演

M29

DBT-0071



特